

---

# 陰陽の魔女

香柳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陰陽の魔女

### 【Zコード】

N1402S

### 【作者名】

香柳

### 【あらすじ】

ノエルはハイランド王国の王女にして魔女。

しかし生来愚鈍なため、満足な魔術ひとつ使えない。

おりしもハイランドはヴァイキングの侵攻にさらされつづつあったが、落ちこぼれ魔女のノエルには、魔術で祖国を守ることすらままならなかつた。

そんな役立たずのノエルに、周囲の風当たりは強くなるばかり。辛い状況の中、彼女は自分を導いてくれる相手との、運命的な出会いをはたすことになるが……。

中世スロバキア風異世界ファンタジー。

## 登場人物紹介

ノエル…ハイランド王国の王女にして、落ちこぼれの魔女。

翼任<sup>イレニ</sup>…東からやってきた半神半人。ノエルのしもべ。

ディアドラ…ノエルのいとこ。優れた魔女であり、ノエルをしのぐ人気がある。

アンガス…ハイランド王。ノエルの父。病身でふせつていて。

ウイリアム…若きローランド王。政略結婚のため、ハイランドへやつてくる。

ジェイミー…マッチョな妖精。ノエルの護衛をつとめる。

リース…赤毛でガタイのいい吟遊詩人。

ゴゴ…イーレンをノエルのもとへ導いた神鳥。ブサカワ系。

## プロローグ

「この夜の幻夢泡には、遠いビックの国の宮殿が映しだされていた。海ぞいの断崖にそりたつ、石造りの城塞。そのてっぺんの露台で、岩に打ちつける波頭を見下ろしたり、そつかと思うところでは夜空を仰ぎみたりしている、赤毛の男。松明の光を反射して、彼の手にした黄金の護符が輝いている。

男は必死に何かを祈っていた。彼の護符は、上部が輪になつた十字の形をしている。はるか西に住まうといふ、クレアトル教徒が持つ十字架だ。

やがて男は何かを聞きつけて、宮殿の内へと駆けこんでいった。しばらくしてふたたび胸壁へ戻った彼は、布包みのようなものを抱えている。その包みを高々と差し上げながら天へ叫び、彼は満面の笑みを浮かべていた。

「……あの人、何をしてるの？」

幻夢泡から目をそらさないまま、翼任イーレンはかたわらの祖父に尋ねた。翼任たちがいるのは、島の中心にそびえる望楼の最上階。そこからは、海上に浮かぶ幻夢泡がよく見える。

おりしも幻夢泡に映しだされた光景の中で、赤毛の男の持つ布包みからちらりと小さな手足がのぞいた。

「あの包みはな、赤ん坊じや。男はさしづめ父親で、無事に生まれたのを神に感謝しとるんじやろつて」

祖父の答えに、翼任シヨウジンは望楼の欄干から身をのりだすようにして、幻夢泡を吐き出した蜃竜に呼びかけた。

「蜃竜！ 赤ちゃんの姿も見せてよ！」

海中の蜃竜にその声は届いたらしく、幻夢泡には男の抱える布包みが大きく映しだされた。

それは金色の巻き毛がうつすら生えた、文字通り真っ赤な顔で泣いている赤ん坊だった。小さな手のひらがしきりに動き、微笑む父

親の赤いあごひげにからみついている。

やがて男は赤ん坊ともども宮殿の内へと消えてしまったので、翼任はがっかりした。六歳になるこれまで隔離生活を送っていたせいで、赤ん坊を見たのは初めてだったのだ。

ほどなくして、幻夢泡はまさに泡のようにはかなく消えた。あとに残るのは、この島をとりかこむ暗い夜空と海、淡い光をはなつ月星の眺めだけ。

「……終わっちゃった。蜃竜は次はいつ、夢を見せてくれるのかなあ？」

翼任は祖父に手を引かれ、望楼をおりて奥殿へと向かった。そろそろ休まねばならない頃あいだ。夜ふかしをしそうだと、それだけ翼任の身に負担がかかるのだと祖父は言つ。

翼任はその特殊な生まれのせいでの、体が弱い。だから大事に大事に、風にもあてぬように育てられている。ただ今夜は珍しく蜃竜が幻夢泡を浮かべているというので、祖父は特別に見物を許してくれたのだ。

「さあて、次はいつになるやら。蜃竜はめったに、おのれの夢を披露したりはせんからなの。それがわざわざこの島のそばで、幻夢泡を浮かべてみせるとは。何を言わんとしてあるのか。あの男と赤ん坊は、何を意味するのか……」

祖父は思案げにつぶやいた。

この蓬萊島をすべる尊い神仙である祖父 東王公とうおうこうにすら、その意図が読めないなんて。それだけ蜃竜は不思議な存在なのだと、翼任は思つた。

蜃竜とは海底深くにひそむ竜神で、いつも地上のさまざまものを夢に見ていい。ときに海上に浮かび上がつては、幻夢泡という巨大な泡を吐き出して、そこにおのれの見ていく夢を映すのだ。神や仙人に対し天の意思を伝えようと、蜃竜はおのれの夢を見せるのだといつ。

「うわ！ お爺ちゃん あれを見てっ！！」

奥殿へとづづく回廊を渡るさなかに、翼任は庭を指さし叫んだ。広大な庭園には、神氣をただよわす桃木が幾百本も生えている。その中心にとりわけ巨大な木があった。桃木の王、桃都樹である。その桃都樹の太い幹が、白い光を放っている。こんなことは、これまで一度もなかった。しかもその巨大な幹には、赤い鱗に銀の角の竜が一匹、巻きついている。

祖父が驚きの声をあげた。

「蜃竜ではないか！ なぜにあやつがここまで参ったのか……？」どうやらあの赤鱗の竜が、先ほど夢を映しだしてみせた蜃竜だつたらしい。

神仙らしく、ふわりと宙に浮かぶように軽々と、祖父は回廊から庭園へおりた。つづいて未熟な翼任が、ぱたぱた音をたてつつその後を追う。

「あれが蜃竜なの？ わ、何あれ？！」

桃都樹のもとへとやつてきた二人は、さらに思いがけないものを見つけた。

太い幹の一部分が黄金に輝き、さらに光が明滅はじめたのだ。心臓の鼓動のように木そのものがどくん、どくんと脈打ち震え、やがて幹の中から、何かが生み出された。

蜃竜がそれを受けとめ、そつとくわえた。そのまま樹下へとおりて、翼任に差し出す。思わず受けとつた翼任は面食らつた。

「え、僕にくれるの？ これは……卵？」

それは翼任の幼い手のひらよりも少しだけ大きい程度の、青灰色の卵だった。

「桃都樹が生み出した卵か……まさか」

祖父が言いかけたそばから、翼任の手の中の卵が割れはじめた。

息をつめて見守ると、ほどなくその中から顔を出したのは

「鵠鵠鳥ハハシコではないか！ 信じられん、今になつてこれが生まれると

は」

孵つたのは、青灰色の羽毛に包まれたひな鳥だった。紅玉のよう

な赤い目でじつと翼任を見つめ、ひと声チイと鳴く。

とたん、翼任の幼い胸に、保護欲のようなものが芽生えた。この小鳥を守つてやらなければ、そつと指先で、その羽先を整えてやる。

「鵠鵠鳥——つてこれの名前？」

尋ねると、祖父は無言で翼任と小鳥とを交互に眺めた。

しばらくして、かたわらに大人しく控える蜃龍に「おぬしの意図はよく分かつた。もう海へお帰り」と命じる。蜃龍は満足げに一声鳴いて舞い上がり、その勢いのまま海中へと飛びこんだ。

祖父はため息をついた。

「なんということだ……よりによつて、おまえが鵠鵠鳥に選ばれるとはのう。わが血筋の者の宿命とはいえ、あまりにむごい」

翼任は眉をしかめた。この小鳥が自分の手のひらで孵つたことが、何か悪いことにつながるのだろうか？

祖父がひざまづき、翼任の小さな肩に両手をおいた。

「よいか、翼任。おまえは生まれたばかりの西王母さまの、守役に選ばれたのじや。さきほどの幻夢泡の、金髪の赤ん坊を覚えておるだろ？　あれが今宵、三千年ぶりにお生まれになつた西王母せこねつはさまのじや。そしてその鵠鵠鳥は天の使者。東王公の血筋の者に西王母さまの誕生を告げに来たもの。……おまえはいづれ、天命にしたがい、西王母さまを守りに行かねばならぬ。それがわれらの血筋の者のさだめなのじや。蜃龍はそれを告げようと、今夜われらにあのような夢を見せたのだろう」

「えつ、西王母さまつて、もしかしてあの、伝説の神女さまのこと？」

「そう。天地の気が乱れきったときに、天命をうけたこの世に生をうける神女。天地に調和をもたらすお方じや。その使者である鵠鵠鳥が、東王公の血筋のものを守役に選び、西王母さまのもとへ導くことになつておる。……だがよりもよつて、か弱いおまえが選ばれてしまつとは。わしが替わつてやれぬものか」

翼任はむつとした。六歳とはいえ、大人に負けぬほどの矜持はある。

「お爺ちゃん、僕は西王母さまを見つけ出して、守ればいいんだよね？ 今からがんばって体を鍛えて、きっと強くなるよ！ それに死ぬまでこじでじつとしてるより、ずっとといいもん」

祖父はふ、と憂い顔になつた。

「西王母さまを見つけ出すところから、おまえは始めねばならんのじゃよ。さつきの幻夢泡を見たろう？ 西王母さまのお生まれになつた場所は、西のさいはての国にようじや。ここからその国までは遠い上、異国の土地神や精霊や妖怪がごまんとおる。それらはおまえを、すんなり通過させてはくれんだろう？」

「でもこのへんの天華國の人間たちだつて、船で西の果てまで行つてるんだよ。人間にできて、神仙にできないわけないよ！」

「おまえには分からぬ困難があるのじゃ。そう簡単にはいかぬ。それに西王母さまにお会いしてから後も。おまえはかのお方をお守りするために、さらなる苦労を味わうだろ？……むしろ本物の苦労は、西王母さまに会つてからのこと」

憂い顔の晴れない祖父に、翼任が困惑していると。

手の中の鶴鶴鳥が、翼任を励ますようにチイチイと、威勢よく鳴き声をあげはじめた。

「大丈夫だよ、お爺ちゃん。この鶴鶴鳥が、西王母さまのもとへ案内してくれるんだから、何もかもうまくいくよ、きっと…」

生まれたての鶴鶴鳥の羽毛は、しつとりと濡れている。それを袖でぬぐつてやりながら翼任が告げると、祖父は諦めたように首をふつた。

突然、森の中に女の金切り声が響きわたった。

「んまあノエルさまっ！ それは皇帝ダケという毒キノコですよ！ いくらお飾りに使うだけでも危険すぎますっ」

「そ、そうなの？！ 綺麗だつたからつー……」

侍女頭に叱られ、ノエルは真っ赤な顔に白い水玉もようのついたキノコを、あわてて近くの茂みに捨てた。

「魔女は薬の専門家のはずなのに、キノコの知識が侍女以下だなんて……。ましてやあなたは、こここの世継ぎの王女でしょう？ いいかげん、しつかりしてちょうどい！」

ノエルと侍女頭のやりとりを聞きつけたティアドラが、いつものごとく厳しい言葉を投げつけてくる。

「その皇帝ダケはね、昔この地がレムロム帝国に攻め入られた時、当時の魔女が敵の皇帝を毒殺するのに用いたキノコなのよ。だからその名になったの。有名な話だし、わが一族の毒物辞典には、でかでかと載つてるはずだけど？」

ティアドラにきつく責められ、ノエルは真っ赤になつた。

二人はいとこ同士で年齢もともに十七歳、どちらもいにしえからの偉大な魔女の血をひく一族だ。ところがその能力と知力にはだいぶ差があつて、すぐに知識を吸収して難しい魔法を使いこなせるティアドラにひきかえ、ノエルは愚鈍で、わざやかなおまじないすら施せない落ちこぼれ魔女だつた。

その容姿も対照的で、ノエルは濃い金色の髪にはしばみ色の瞳をしており、その子リスのように大きくつぶらな瞳のせいもあって、温かく愛らしい印象を人に与える。対してティアドラは冴えた月光のような銀髪に紫水晶の瞳で、「氷の女王」と評されるほどの、冷たくととのつた美貌の持ち主だつた。

ティアドラは、その白く秀麗な面だちを憂わしげにゆがめつつ言

つた。

「まあでも、あなたはたしか『猫でも分かる魔法入門』を学んでるところなのよね、ノエル。毒物辞典なんてまだまだ難しい段階だわ。……考えてみると、入門書なんて私は十歳の頃に学び終えたのに、あなたが十七歳になつてもまだその段階なのつておかしいわ。教師が悪いんじゃない？ 魔術修道院長を、クビにしたほうがいいのかかもしれないわね」

「い、いいえティ！ 院長さまは悪くないわ！ 私の覚えが悪いだけなの。入門書を勉強しはじめて七年たつけど、やつと三分の一を覚えたところだし。だいたい私、ひとつつの魔法をマスターするのに半年はかかるつてしまふの。院長さまは、無理に勉強しても忘れるだけだから、私のペースでゆっくり学びなさいと言つてくれたわ」ノエルは素直に答えた。ディアドラの軽蔑のまなざしが痛かったが、本当のことなので仕方がない。

「……あのね、ノエル。今のこの状況では、ゆっくりお勉強していける時間なんてないのよ、分かってる？ ヴァイキングがこのハイランドを狙つてて、本島に攻めこんできている。対するこちらは、王であるあなたのお父上がご病気だし、隣国との同盟もなかなか成立しない。しかも王都であるこの小島は、いつも悪霊に襲われてばかり。こんなときこそ、魔女である私たちがなんとかしなきゃいけないのよ？ キツいことは言いたくない。でも私が必死で民と国を守らうと考へているのに、あなたときたら、ゆっくり学べばいいと考えてるなんて……！ 私のつらさを、あなたは分かつてないんだわ！」

「ディ、そうじゃないの！ そつじゃなくて私は……っ」

もちろんノエルだと、おのれの無能さを申し訳なく思つてゐるし、いつも一所懸命に努力しているのだ。ただ結果がともなわないだけで。

だが口下手なせいで、ディアドラに誤解されてしまつたらしい。いつも冷静でしとやかなディアドラが、白い頬を紅潮させてわな

わなと両手を震わせている。そのままを見て、侍女頭がなだめにかかった。

「ディアドラさまが私たちのために尽力くださつてることは、皆がよく分かつておりますわ！ もはやこの『魔女の島』は、あなたさまなしには立ちゆきませんもの。悪霊をなんとか撃退できるのも、王の特別なお薬を調合できるのも、ディアドラさまだけ。魔術修道院長ですら、そのお力には及びませんし。さあ、どうかお心をおしずめになつて。きっとお疲れのですわ、不眠不休で働いてらつしやるんですもの。残りの材料は私たちで集めますから、ディアドラさまは先に城へお戻りくださいまし」

するといつのまに集まつていたのか、他の侍女らもディアドラをとり囲み、感謝と慰めの言葉を口にした。それとは対照的に、魔女としての義務をこれっぽっちも果たせないノエルに対しても、侍女らは態度で反感を示している。

自分へのとげとげしい空気を感じとつて、ノエルはいたたまれずに言った。

「……あの、残りは私が集めて持つて帰るわ。だから皆は、ディをつれて城へ戻つてちょうだい」

すると侍女らは全員ディアドラにつき従い、ノエルを残して森を去つていった。驚いたことに、共に残ろうとする者は誰もいなかつた。ノエルは王のひとり娘だというのに。

このハイランド王国では、第一王女に王位継承権があり、その王女の夫となつた者が王として即位し、国を治めることとなつてゐる。しかし王弟の娘であるディアドラがここへ来てからといつもの、城下の民たちは、ノエルを廃嫡してディアドラに王位継承権を与るべきだと噂しているようだつた。

どうやらその思いは、城内の使用人らも変わらないらしい。

（でもしじうがないわ、私はとろくさいから。国と民のためを考えたら、ディが治める方がいいもの。でもーー）

でも、自分が皆の役に立てないことが悲しくてならなかつた。せ

めてティアドラの十分の一でも、魔法が使えたなら。薬草の知識を身につけられたなら。父王や民らを安心させられるのに。

(……落ちこんでる場合じゃないわ。今夜にも悪靈の襲撃があるかもしれないんだもの。早く枝を集めて帰らなきゃ！)

めそめそと泣き出してしまいたい弱気を、なんとかノエルはおさえこんだ。

そもそも彼女らは、魔除け飾りをこしらえるための材料をとりに、この森へ来ていたのである。

というのも、このところ「死の船団」に乗った悪靈アンクウの大軍が海からあらわれ、たびたびこの島を襲うようになつていてからだ。

アンクウは海で死んだ人間の迷魂だと言われており、手当たりしないに生者をさらっていく。彼らの「死の船団」に乗せられた者は、その仲間にならざるをえないのだという。

だが彼らがこれまで、陸地の者を襲つたという例はない。おそらくはハイランドを侵略しつつあるヴァイキングが、魔法でアンクウを操つてているのではないかと、ノエルの父王は考えていたようだった。

とにかくその悪靈の襲撃に備えるには、城下を魔法結界で守るしかない。そして魔法結界をこしらえるには、魔除け飾りを城下の要所にかかる必要があつたのだ。

魔除け飾りには、ヤドリギとナナカマド、それに色とりどりの花や実、キノコが要る。春とはいえ、まだまだ空気が冷たく手もかじかむ中、それらを集めるのは容易な仕事ではない。さらに数日で魔除けの効果が薄れるから、そのつど材料を集め、こしらえる手間がかかるのである。

これまでに皆の集めた材料は、森の入り口につながれた、ロバの引く台車に積まれている。ノエルがその量を確認すると、ヤドリギが圧倒的に足りなかつた。

だがそれも仕方のないことだ。高い枝に寄生するヤドリギをとる

のは、重いドレスを身につけた女には難しいことだった。それにこそそもそも、妖精の森である。この森のヤドリギには妖精が化けたものもあり、その場合は呪文を唱えつつ切りとらないと祟られてしまうという。おつかなびっくり作業していく、効率が良いわけはなかつた。

（しようがないわ、久しぶりに木登りするしかないわね。どうせ誰も見てないし、やつちやおう）

ドレスの長い裾をベルトにたばさむと、ドロワーズが丸見えになつた。とても人前にはさらせない姿である。だがここは王家所有の森であり、みだりに誰かが来る可能性は低い。

ノエルは手近なヤドリギのついた木に、思いきつて登りはじめた。時刻はもうすぐ暁。夕暮れまでに魔除け飾りをこしらえ、城内の広い範囲にそれをかけなければならぬのだ。急ぐに越したことはない。

幸い木登りは苦手ではなく、パイを食べ終わるほどの時間のあいだに、ヤドリギをだいぶ集めることができた。

（もうこれでいいかな……？）

そう思いはじめる頃にかぎつて、良いものが見つかつたりする。ノエルは少し奥まつた場所のオークにかかるヤドリギが、とりわけ大きくかつ葉もみずみずしいのに気がついた。あれを城門にかける飾りに使えば、立派な魔除けになることだろう。アンクウへのよい防御となるに違ひない。

そのオークに登り、妖精鎮めの呪文を唱えつつ、ヤドリギへと手をのばしかけた時。思いがけないことが起こつた。

「んあ？！ なんだよおまえ？ その刀で、俺の体に切りつけようつてのかあ？！」

とどろいたのは、野太い男の声である。ノエルは驚き、手にした小刀をとり落としてしまつた。どうやらこのヤドリギは、妖精の化身だつたらしい。ノエルの呪文も効果なしだつたのだ。

「なんだ。あんた、魔女じゃないか？！ ……もう本物の魔女なん

「？  
て、ハイラングにほいないと思ってたのに。あんたはどこの、誰の  
子だ？ どうして俺らのところへ、挨拶に来なかつた？！ 今さら  
俺に何の用だよ？！ 俺はジョイニーって言つんだけど、あんたは

ノエルが謝る暇もないほど、ヤドリギが矢継ぎ早に尋ねてくる。  
と、いきなりつる草のようにその枝が伸びてきて、ノエルの手首  
に巻きつく。驚いたノエルが叫び声をあげようとしたどたん。

「世界の歴史」は、二月革命で声を立てるが、これが大

絶叫が森の中に響きました。ヤドリギが発した野太い声だ。

ヤドリギの枝がノエルの手首から、火傷したかのよつと離れる。

あまりのことについノエルが木の上で硬直していると、ヤドリギは自らオーネを離れて変身し、どたりと地面に降り立つた。ノエルの知るど戦士よりも上背がある、緑色の髪の大男に、ヤドリギ妖精は変じたのだ。筋骨隆々の巨人は、人々がふつうに想像する妖精の姿とはかけ離れている。ノエルも本物の妖精を見たのは初めてだったので、混乱と驚きにどうしてよいか分からなくなつた。

見逃してくれよおつ！！」

ヤドリギ妖精はいかつい顔に恐怖を浮かべ、一いつ切さいを見上げて叫んだ。そして答える間もなく風のよみに疾走して、森の奥へと逃げていく。

（あ……あれが、ヤドリギ妖精なの……？ なんか、魔法入門書の記述とかけ離れてるような姿してると……？ び、びっくりした。それにしても、何にあんなにおびえてたんだろう？ そういえば、ジエイミーって名のつてたわ。私の馬と同じ名前なのね……知つたら氣を悪くするかも、だけど）

樹上であつけにとられながら、ノエルは妖精の去つた方角をしば

し、見つめていたのだった。

ハイランドは、ゲール島の北半分を占める王国である。その王都エイデンヴァーランドは、ゲール島の西北端によりそりうに浮かぶ「魔女の島」に置かれていた。ゲール島からは、ほんの目と鼻の先にある小島である。

そして王の住まう城は、「魔女の島」の海ぞいの崖に、いかにも堅牢なよつすでそそり建つっていた。灰色の石組みでできた無骨な外観の城塞で、華麗さや洗練にはほど遠い。だが素朴でたくましいハイランド人の生きざまを、象徴するような城だつた。

ハイランドは貧しい。気候が寒冷で土地は瘦せている。だがその民は、氏族ごとに集落をこしらえ放牧と農業に精を出し、つつましやかな幸せを築きあげていた。

ところがそのささやかな平和は、ここ一年のヴァイキングの襲撃で崩壊した。

ヴァイキングはもともと、北東の海域から進出してきた海の民だが、十年前に、ゲール島の南に位置するヨーラ大陸を制覇した。その勢いに乗つて、一年前にゲール島へも侵略を始めたのだ。

そもそもゲール島は、一つの国に分かれている。北のハイランド、南のローランドだ。この二国が団結すれば、ヴァイキングを撃退することも可能だつたらう。だが長らく島の霸権をめぐつて争つてきた二国は、なかなか同盟を結べずにいたのである。

足なみそろわぬゲール島側は劣勢に立たされており、島の要所がヴァイキングの手中におさめられつつあつた。

不幸はつづくもので、ちょうどヴァイキングの侵略が始まつた頃からハイランド王アンガスは原因不明の病に苦しみはじめ、軍兵を率いて戦うことすらできなくなつた。かわりに戦場での指揮をとりつづけているのは、王弟ベリックである。

アンガス王は、「魔女の島」の王都で病床にふせり、その王を守り

支える役目は、王女ノエルと王弟ベリックの娘、ティアドラが担うこととなつたが。

さらに追い討ちをかけるように、この数ヶ月、王都は悪靈アンクウの襲撃の恐怖にさらされはじめたのだ。

今やノエルとティアドラの双肩には、この国の命運がかかっていた。

「ノエルさま、城外の要所すべてに魔除け飾りをかかげ終えました！ そろそろ戻らないと、城門が閉じられます！」

魔術修道女らの報告を受けて、ノエルはすぐさま城内への避難を命じた。閉門の鐘の音が、せかすように城下に鳴り響いている。

悪靈アンクウによる夜襲を恐れたアンガス王は、夜間は民らをおのれの城内で保護することと定めていた。

城では騎士や兵らが、夜を徹しての守備につく。早々に城門も閉じねばならず、遅れれば皆に迷惑をかけてしまうだろう。

「さ、ノエルさま！ 早く馬へお乗り下さい！」

警護の騎士が、焦りながらノエルに手綱を渡す。ノエルの愛馬ジエイミーも、恐怖を予感して興奮気味だった。

ノエルは愛馬にまたがり、騎士と共に城内への帰途を急いだ。

西の海に、今にも日が沈もうとしている。とにかく夜が恐ろしい。城内ではすでにティアドラと魔術修道院長が、魔法結界の術にとりかかっている。ノエルは魔術修道女らと手分けして、結界の助けとなる魔除け飾りを、城外の防壁のあちこちにとりつけていたのだった。

「待つて！ 閉めないで――！」

轟音をあげて、城の跳ね橋が上がるとしている。ノエルたちは馬を疾走させて、なんとか閉門に間に合つた。

ティアドラたちの魔法結界は、ほぼ完成しつつあるようだ。目に見えないが、結界が蜘蛛の糸のことく周囲にはりめぐらされているのが、落ちこぼれとはいえ魔女のノエルには感じられる。

城内の庭には、所せましと多くの避難民らがひしめきあつていた。

仮設テントが張られ、炊き出しが行われ、民衆らは不安げな表情を浮かべている。元気に夕飯のオートミール粥と薰製ニシンをほおばつているのは、無邪気な子供たちくらいのものだ。

広場のすみでは王のはからいにより、本島から呼びよせた道化師の一団が芸を披露し、民らの不安をそらそうとしていた。玉乗りや刀剣投げなど、そこだけを見ればまるで祭り日の催しのように華やかな風景だ。

ノエルが通りすぎたすぐそばでは、吟遊詩人がリュートを奏で、女たちの熱い視線を浴びていた。筋骨隆々とした大男で、顔にはなめに走る刀傷まである。どうやら戦場で負傷した兵士が、職業を鞍替えしたという態だったが。男くさい、苦みばしった吟遊詩人らしからぬ容姿がかえって、女たちの関心を引いているようだった。

「ねえ詩人さん、景気のいい歌にしてよー。こづ、ぱあっと明るくて、怖いこと全部忘れちまうようなのを、わー！」

「そうそつ、あんたの良い声で悪霊を追いはらっておくれよー。」

そうリクエストする女たちの声が聞こえてくる。

近づく恐怖を忘れようと、みな必死なのだ。よくよく見ると広場にいるどの民も、その顔に心からの笑みが浮かんでいない。何かにすがりつくような目をしている。

ノエルは皆を守るために何でもしようと、改めて決意を固めた。

「ノエルさま、王がお呼びです」

興奮する愛馬ジヨイミーをなだめつつ、厩舎へたどりついたところへ、小姓がそう告げに来た。ノエルはすぐさま城の上階にある、父王の寝室へと向かった。

「お父さま……お加減はどう?」

病床に横たわるアンガスからは、つんとくる薬湯の匂いがただよっていた。その顔色も赤みをおびて、いつもより容態が良じよつと見える。

ノエルがそっと枕元の椅子に腰かけると、父がその手を握つてきた。かつてのアンガスは燃えたつような赤毛の、日に焼けた肌をしたたくましい大男で、ハイランダーのほまれと讚えられたものだつたが。今はげつそりとやつれて顔色も青白く、見る影もない。

「ああ。ディアドラの薬湯がだいぶ効いてきたようだ。さつきよりは楽になつた。……城下の魔法結界はどうだ? ディアドラはずつと魔術修道院にこもりきりで、中のよつすが分からんのだ。うまくいつているといいが」

「もちろん大丈夫よ! きっとお母さまが生きておられたら、こんなふうに完璧な結界を張られたんじゃないかと思うくらい。ディは本当にすごい。とても私と同じ年のこととは思えないわ」

誉めちぎりながらもノエルは内心、おのれが恥ずかしくてたまらなかつた。偉大な魔女だった母の血を、これっぽっちも受け継がなかつた落ちこぼれであることが、情けなかつたからだ。

「……ノエル、おまえはとてもよくできた子で、私の誇りだ。他人と比べて己を卑下するのは空しいことだぞ。神はわれら一人ひとりに、異なる宝を与えたもつたのだから。むろんディアドラも素晴らしいが、おまえにも秘められた力がある。まだ皆には見えてないだけで」

ノエルは思わず、父の優しい手を頬にあてていた。世界中に否定されても、ただひとり肉親が自分を信じてくれるなら、それだけで救われる。

実のところ、父がいつも優しくなれるとは、以前のノエルは思いもしなかった。

健康だった頃のアンガス王は、ただ一人の跡継ぎであるノエルに対して厳しかった。愚鈍な彼女を、なんとかして人並みにしようとされていたようだった。だが生まれてはじめて重い病気をわざらつたことで、ものごとを違う見方でみることができるようになったと父は言う。ノエルはノエルらしくがんばればいいのだと、励ましてくれるようになつたのだった。

だが父娘のつかのまのやすらぎの時間は、物見櫓からの激しい鐘の音でうち破られてしまった。

「悪靈だっ！ 海上からアンクウの『死の船団』が来るぞおっ！！」あたりに知らせる、緊張した兵士の聲音。ノエルはとたん、緊張に青ざめた。力づけるように、父が手を握りしめてくる。

ノエルは父の寝室を出るや、上階へのらせん階段をかけのぼった。胸壁へ出て、海上の方角を見やる。ぼうと青くまがまがしい炎に包まれた、古びてはいるが大型の帆船が数十艘、こちらへぐんぐんと近づいている。

それはまぎれもなく、悪靈アンクウひきこむ「死の船団」だった。

悪霊の襲撃を知らせる鐘が、うるさいほど鳴り響いていた。

城内に恐怖が満ちる。　今夜を生きのびられるだらうか？  
民のほとんどは、あまりの恐怖に声も出ず、おのの十字架を手  
にひたすら神に祈つていた。

厩舎や家畜小屋からは、おびえた動物たちの叫び、それに暴れる  
物音が聞こえてくる。獸たちは、人間以上に悪霊の不気味な氣配を  
感じとつてゐるのだろう。

城兵とそれをまとめる騎士たちが、おのの配置について武器を  
かまえる。魔術修道女らも結界を保持しようと、魔除け飾りのもと  
で神への祈りと守護呪文とを、交互に唱えはじめた。

ノエルは急いで主塔の大広間へと向かつた。

そこにはこの戦闘の指揮をとる、王の腹心たる家臣らがつめてい  
る。彼らはノエルを見るや、一応の礼儀で席を立ち貴婦人への礼を  
とつたが、そこから先は無視だった。緊急時で、役立たずのノエル  
にかまう余裕などないのだ。

そんな家臣らにてきぱきと指示を出しているのは、主卓の高座に  
女王の「」とくかけているティアドラだ。その姿を見てノエルは驚き、  
思わず尋ねかけた。

「ディ！　魔法結界のほうは——」

「そちらはもう完成したわ。あとは魔術修道院長さまに、維持して  
もらえばいいだけ。城兵を統率する王族が、ここには必要だもの…  
…しようがないわ、他に適任者がいないから」

皮肉っぽく言つと、ティアドラはすぐに家臣らの報告のつづきを  
聞いた。

「ティアドラさま。物見櫓からの報告では、ネヴァンまでもがこの  
襲撃に加わつてゐるようです。」こちらの守備は空中からの攻撃には  
脆弱ですから、こいつかの分隊を今すぐ、ネヴァン対策にまわす許

しをいただきたい

「ネヴァンとは？」

「大鶴の姿をもつ魔物です、ディアドラさま。かつてヨーラ大陸の戦場で、目にしたことがあります。翼を広げると馬車一台ほどの大きさがあり、人肉を好むのです。……あれが空から襲つてきたら、このままでは城内全滅でしょう」

はたで聞いていたノエルは、ぶるりと震えた。

まさかアンクウともども、そんな恐ろしい魔物までもが襲つてくるとは。

やはりこれは父王の読み通り、ヴァイキングによる企みに違いない。そうでなければ悪霊と魔物が大挙して、わざわざここを襲つたりするはずがないからだ。

「分かったわ。私は戦に不慣れだから、すべては貴方たちの考えに従います。必要な兵を率いて、そのネヴァンの襲撃に備えてちょうだい。……ノエル」

急に名指しで呼ばれ、ノエルの心臓がはねた。

「あなたには正門の守備に協力してもらうわ。あそこはこの城の要だもの。たとえあなた程度の魔女でも、いよいよは心強いから」一いちいちとげとげしい物言いをされても、ノエルはすでに慣れきっていた。それに自分が役立たずなのは事実なので仕方がない。こ<sup>こ</sup>は命がけで、城門を守ろう。死に物狂いでやれば、少しばषの助けになるかもしない。

ノエルは祖先から伝わる「魔女の剣」を手に、正門へと向かった。破魔の力をもつこの剣ならば、アンクウを倒すのも容易だ。少し前からノエルは騎士さんに頼みこんで、剣技を教えてもらっていた。愚鈍な彼女はここでも覚えと要領の悪さを發揮したが、なんとか基本的な技のひとつふたつを、身につけることができた。

運がよければアンクウを一体ぐらいは、地獄への道連れにできるだろう。

城の正面は、水堀と落とし格子、そして鉄扉で三重に守られています。ふつつの戦闘なら十分に持ちこたえる堅牢な城門だが、今回の敵はふつうではない。悪霊と魔物なのだ。魔法結界や魔除け飾りがなければ、すぐにも破られてしまつただろう。

しかし、その頼みの魔術にも限界はある。

（いけない！ 結界にほこりびができたわーー 破れ目を敵が広げてるーー）

そうノエルは感じとり、腰の剣を抜いた。

この半年の間に、アンクウは一度襲ってきた。ディアドラの結界のおかげで、なんとか城門を破られずに済んでいたのだが。今度の襲撃では、なみならぬ魔力のエネルギーを、ノエルは感じていた。過去の襲撃は小手調べ。今度こそ本気で、アンクウはこの城を落とすつもりなのだ。

どん、どんと鉄扉をきしませる、化け物どもの想像を絶する力。

彼らの侵入を許せば、こちらは全滅するだろつ。

「このままでは扉を破壊されてしまうーー 何か支えになるものを持つてくるんだつーー！」

騎士が叫び、それに応えて兵士らが丸太で扉を支える。が、それも氣休めにすぎない。

悪霊のおぞましい雄叫びや、おがまがしい魔物の鳴き声が、鉄扉の向こうから聞こえてくる。

皆はすでに覚悟していた。どつあがいでも、もつすべこの城門が破られてしまうだろつことを。

ノエルは抜き身の剣をかまえた。いつまでくると、もはや恐怖はない。

どん、どおん、どおおおん！

耐えきれず鉄扉が外れ、轟音をあげてこちら側へと倒れてくる。

もうもうと土煙があがり、松明の炎をさえぎる。

城外の闇の中から現れ出でたのは、海の死神 惡靈アンクウの群れ。ぼろぼろの古い衣装をまとう白骨化した人間が、青い炎を全身から発している。その手には、まがまがしい大鎌。幾度見ても見慣れることのない、不気味な姿だつた。

津波のごとく、その大群が城内へとなだれこんでくる。

弓兵、弩兵らが無数の矢を射かけても無意味なほどの数だ。後から後からわいてくる。

破魔の効果のあるヤドリギとナナカマドの枝を身につけていた城兵たちが、入口でとどめようとアンクウに斬りかかる。だが、重い剣で斬つても突いても粉碎しても、アンクウは次から次へとわいて出てくるのだつた。

「くそつ、とんでもない数で攻めてきあつたつ！　このままではこちらが全滅するぞつ！」

ノエルのそば近くで戦つっていた壯年の騎士が、悪態をついた。そうする間にも惡靈は怒濤の勢いで押し寄せてきて、城兵らをなぎたおしていく。

ノエルは「魔女の剣」をふりまわし、アンクウの攻撃を避けるので精一杯だつた。ノエルだけでなく、その場の騎士も城兵らも同様だつたろう。

「ああつ！　ノエルさま！」

転倒したノエルに、身近にいた騎士の一人が声をかけてくる。だが彼にも余裕がなく、こちらを救うことなどできはしない。ノエルはなんとか立ち上がりうとしたが、その瞬間、青白い炎をまとう骸骨が大きな鎌をこちらに振り下ろそうとしているのに気づいた。

死が間近にせまる。

凍りついた眼差しに、まがまがしく青白い大鎌がせまつてくる。

ノエルは悲鳴をあげることも、身動きすらも出来なかつた。

何かがぶつかり、金属同士のこすれあう音。そして叱咤するかのような声。何が起きているのか分からないうちに、ノエルはふわり

と身体「」と、すくい上げられた気がした。

気がつくと誰かの小脇に抱えられ、守られていた。救い主はもう片方の手に細身の剣を握り、いとも簡単に悪霊たちをなぎはらっている。歴戦の勇将ですら、アンクウの骨を断ち切れず苦戦しているというのに。

救い主はすらりと背が高く、体つきもひきしまっている若い男のようだ。アンクウの身が発する青い光が、彼の姿をほのかに照らし返している。ただ彼は暗色のマントを頭からすっぽりかぶつており、ノエルからはその顔を見ることすらかなわない。

ふと、ノエルは不思議な花の香りをかいだ。この救い主の青年の衣から、そのかぐわしい香りは漂つてくる。ヒースでもラベンダーでもない、大陸渡りの香水とも違う、不思議な甘い香り……。

だがその香りにひたる暇はなかつた。アンクウが恐るべき数と勢いで、城門から押し寄せてくる。城兵は自らを守るために必死で、とどめるすべはない。悪霊が津波のように呑みこもうとしていた。

このままでは全滅してしまう。

ノエルは衝動的に彼の腕を握り、助けを求めていた。  
「お、お願い、助けてください！　アンクウの侵入を止めてください！」

口にして初めてそれが、無意味な願いだと悟つた。なにしろ敵は無数におり、これを独力で防ぐのはとうてい無理だからだ。

「……あなたはまだ目覚めておられないらしい。目覚めればこんなもの、すぐにもどうにかなるだろ？」

せまりくるアンクウを数体、ひとりきに倒しつつ、彼が初めて言葉を発した。やはり若い男の声だ。だがその発音にはやや異国なまりがある。

次に彼は、せまりくるアンクウらの首をなぎ払つた。こうじろと転がり落ちた髑髏にひとつを、器用に剣先ですくう。青い炎をまと、まがまがしい髑髏だ。それを彼が剣先で独楽のように回すと、青い炎が油をかけたかの「」とく燃えあがり、真紅色に変化した。

これらの動作は、ほんの一瞬のこと。

そして彼は、真紅の炎を吹き出す髑髏を剣先にのせたまま、さつと襲いくるアンクウらの鼻先をかすめていった。

髑髏の炎が噴出し、雷光のようにあたりを駆けめぐる。真紅の炎が襲いかかるや、おぞましい絶叫とともに、アンクウたちが燃えていく。

(魔法……これは魔法なの？！)

ノエルは驚愕で声を失った。アンクウたちが燃え、そして灰になつていくかたわらで、真紅の髑髏はますます激しく炎をあげた。そして謎の青年はそれを、城門のほうへと投げつけた。真紅の炎が火柱となり、アンクウらの侵入をばむ。

「ノエルさま！　これは一体……？　あの炎は？！」

救援に駆けつけたらしい城兵たちが、あっけにとられてノエルを見やる。あたりには死傷した城兵らが倒れ伏している。壊れた城門、そしてそこで燃え上がる真紅の髑髏。城外の悪霊どもは、その炎に恐れをなしたか、城門へ近づいてこようとはしない。

「い、今のうちに城門をつ！」

気づいたノエルが叫び、あわてて壊れた城門へと駆けていく。つづいて救援兵らも城門へとびつく。屈強の者が数十人、力をふりしほって倒れた鉄扉を元通り閉め、横棒を通した。

皆がほっと安堵したところで、騎士のひとりが尋ねてくる。恐怖と好奇心がないまぜになつたような表情だった。

「ノエルさま……これは全て、あなたの魔力でなされたことですか？」

言われてはじめて、ノエルは気づいた。いつのまにかあの謎の救い主が、消えていることに。

「ち、違うわ。私じゃありません。知らない方が 魔法使いなんか兵士なんかすら分からぬけど、とにかくかなりの魔術と剣術を身につけた人が、私を救い、アンクウを追い払ってくれたのよ。あなたがたは、の方を見なかつたの？」

「われらが駆けつけた時には、ここに生きて立っていたのは、あなたさまでした」

「……そのことは後にしましょう。それよりも、この怪我人たちを助けなければ！ 救護班を呼んでちょうだい。それから、他の場所は大丈夫なの？ 戦況は？」

焦つて尋ねたノエルに、騎士は「ご安心を」とうけあつた。  
「ディアドラさまがあの偉大な力で、大鴉どもを滅ぼしてくださつたのです！ まもなく城外のアンクウどもも、一網打尽となるでしょう。……本当にあのお方の魔力は素晴らしい」

騎士はまるで、神を崇拜するかのような表情で、主塔の方角を見やつた。ディアドラのいる指揮本部であるその場所からは、強力な魔力の気配が、ノエルにも分かるほど伝わってきていた。

「 それでも、ディアドラさまの魔力の強さときたら半端じやねえ。まるで言い伝えの、偉大なる魔女のようだったな。俺はこの目で見たぜ、あのどでかい鴉どもがディアドラさまの雷魔法で、ばたばた落ちていくのをさ！」

「それにディアドラさまの狂いの魔法のおかげで、アンクウどもが同士討ちを始めやがって全滅したんだ。まさに偉大な魔女の再来だ……ああ、惜しいなあ。世継ぎの王女がディアドラさまだったなら良かつたのに。の方なら、ヴァイキング軍なんぞひとひねりだろうしな」

通路の端で城兵らが熱っぽく語っているのを、父の寝室へ向かう途中のノエルは、偶然に立ち聞いてしまった。とたんにそのルートを通るのをやめて、迂回する。この気まずい場面に、これまで何度出くわしたことだろ？

三日前の晩、海から「死の船団」がこの王都へ攻め寄せてきた。これまでにおびただしい数の悪霊アンクウ、それに大鴉ネヴァンまでもが加わった敵の来襲に、王都もこれまでかと思われたが。王弟の娘ディアドラの強大な魔力がその窮地を救つたのである。ディアドラへの賞賛の声は、やむことがない。今なお城の内外を問わず、人々は彼女の魔法の話でもちきりだった。

一方、ノエルへの皆の評価はどうと、ディアドラへのそれとは対照的である。

正門の守備を任せられたものの、城門を破られたあげく多数の城兵が死傷し、おのれのみ無傷で生きながらえた王女。情弱な卑怯者。ディアドラのさしむけた救援兵のおかげで正門を守りきれたのだと、ひそかに揶揄されていた。

ノエルを土壇場で救つたあの謎の青年のことは、全く噂にはならなかった。謎の戦士だか魔法使いだかが現れてノエルと城門を救つ

たなど、あまりに荒唐無稽な話だつたからだ。誰もノエルの言葉などは信じず、結局のところ、城門を守つたのは、ディアドラのことでした救援兵たちだということで落ちついた。

ノエルはもとより大らかで、細かなことは気にならない性格だつたが、さすがにこの針のむしろのような状況はこたえていた。口には出さずとも、皆が自分を役立たずと思っているのが伝わってくる。それに城門守備の兵たちを死傷させたことに対して、彼女自身が深い罪悪感をいだいていた。自分にもつと魔力があつたなら、皆を守れただろうに。

ノエルがせめてもど、負傷者の世話や城壁の修理などを手伝ったいと申し出ても、それすら断られる始末だつた。ディアドラは行く先々で、人々に指示や助言を求められるといつのこと。

「……ノエル、顔色が悪いぞ？ もうわしの世話はよいから、部屋でやすみなさい」

父のもとをたずねると、逆にそんな風に心配されてしまった。ノエルの鬱屈は、一目で分かるほど表にでていたらしい。

そのときアンガス王の寝室には、薬湯をとどけにディアドラも来ていた。

「そうねノエル。たしかにあなた、疲れてるようだし。薬湯は私が作るしあ世話は小姓たちができるから、あなたは戻つたほうがいいわよ？」

暗に役立たずだから帰れと言われ、ノエルはしょんぼりしつつ父の頬に軽くキスして立ち去るうとしたが。

「ノエル、わしには分かつておる。大丈夫だ、いつか皆も、おまえの良さが分かる日がくるから」

そう父にささやかれ、ノエルはじわりと涙がにじみそうになつた。父の寝室を出ようとしかけたところで、ノエルは走りこんできた小姓と衝突しそうになつた。

「も、申し訳ございません、ノエルさま！ ……で、でもあの、これは緊急の知らせです……あの、ベリックより急使が参りました

！」

あわてふためく小姓に、寝床のアンガス王が声をかける。

「よい。使者をこの部屋へ連れてまいれ。わしが直接、話を聞こう」

ノエルもティアドラも、その場にいた他の小姓や侍女たちも、皆が一様に緊張した。戦場にいる、王弟ベリックよりの急使。それはもしかしたら、悪い知らせかもしない。たとえば本島がヴァイキングに占領された、というような。

重要な用件は文書ではなく、信頼できる者による言伝である。

アンガス王の寝室は人払いがなされた。

まもなく招き入れられた急使の騎士は、埃まみれの旅装姿だった。乱れた格好で御前へまかり出たことの許しを請うてから、使者は用件を口にした。

「ベリック様より、言伝です。『ローランドとの同盟が成り、ヴァイキング軍を追い払うことに成功した。ついてはローランド王ウイリアム殿ともども、同盟の正式な誓約書を交わし、また両国の儀儀をととのえるためにそちらへ向かう』とのことです」

皆は一様に、驚きの声をあげた。

あれほどに難航していたローランドとの同盟締結。この件については王弟ベリックに一任されていた。それが成ったのは、激しいヴァイキングの猛攻に耐えかねて、土壇場で互いに歩み寄った結果なのだろう。

「なるほど。ベリックは巧みに取引したらしくな。……ノエルかティアドラ、どちらかを嫁がせることを切り札に、同盟を締結させたか」

アンガス王が二人の少女を見やりつつ、重苦しげにつぶやいた。

ゲール島を一分するハイランドとローランド。長らく争ってきた二国ゆえに、これからもヴァイキングへの共同戦線をはるには、政略結婚により関係を強化するよりほかはない。これまで互いに、憎しみとわだかまりばかりを抱きあう関係だったが、それもここで終結させねばならないだろう。

「ローランド王は、こちらへ見ただめに来るということですね？」

私とノエルと、どちらを妻にするかを決めるために？」

確認するようにティアドラが尋ねると、使者である騎士はやや気まずげにうなずいた。

ようするにローランド王は、ハイランドのもつとも高貴な少女二人を、品定めに来るということなのだ。

しかし、誰もが沈黙したが。どちらが花嫁に選ばれるか、皆はもう分かつていた。

ローランドには強力な魔女も魔術師もない。ならば選ばれるのはきっと、「偉大なる魔女の再来」とうたわれるティアドラだ。そもそも美貌でも知性でも優雅さでも、ノエルは何一つティアドラに勝つていないのである。

使者はやがて、思いきったようにそれを口にした。

「……ローランド王ウイリアム殿は、すぐにでも花嫁を本国へ連れ帰りたい所存のようです。ヴァイキングの再度の侵攻があるやもしれぬので、ことを早急に済ませたいと。ゆえにこちらには事前に支度をしておいてほしいと、ウイリアム殿じきじきに私めに仰せになりました」

わだかまりのある隣国の王との婚姻に、何ら心の準備をする間もないまま、嫁がねばならないとは。ノエルはティアドラの行く末を心配した。

そう、ノエルとてローランド王が自分を選ぶとは到底思えなかつた。正直なところ、心の奥底ではそれにほっとする部分もあり、そんな自分をノエルは責めていたが。何より強い感情は、ティアドラの今後の運命への懸念である。長く憎みあつてきた敵であるローランドの国王。彼がティアドラを大切に扱うという保証はない。「急の使い、大儀だつた。そなたはゆっくり休むよい。ベリックたちへの迎えについては、家宰に命じて手配をさせよう」

アンガス王が使者をさがらせると、寝室内には重苦しい沈黙がありました。

「私、部屋へ戻させていただきますわ。少し考えたいことがありますので。……もしも私が花嫁に選ばれたなら、伯父さまの薬湯を作れるものがいなくなりますね。その際は魔術修道院長に、作り方を細かく指示しておかねば」

淡々と告げて、ディアドラが部屋を出て行った。その後姿を見ながら、ノエルは呆然としていた。ディアドラのさりげない言葉に、衝撃を受けたのだ。

ディアドラがローランド王に嫁げば、魔法結界も、父王の薬湯も、そして王国の安全も。全てが失われてしまうのだと、ノエルはそのとき初めて気づいたのである。

(悩んでも仕方ないし、思いきって魔術修道院長さまに相談してみよう。の方なら、もしかしたら私の馬鹿を治す方法をご存知かもしねない )

ノエルは大真面目だった。とにかく國と民のために、自分がしっかりしなければならない。一人前以上の魔女にならなければいけないのだ。それも大至急。

ノエルは夕食後、城内の魔術修道院へと向かつた。それは彼女の住まう主塔の西にあり、跳ね橋を渡つた向こうにある一階建ての建物である。その修道院の上階が、院長と修道女らの部屋だった。魔術修道院とは、神に仕えつつ魔術を習う修道女のための施設である。ノエルは幼い頃から、この王城付属の修道院で魔術を習つていた。

「……まあレディ・ノエルったら、あいかわらず面白いお方ね。お馬鹿を治す方法だなんて！ ほほ、あつたら私がとうに試しておりますわ。私ときたら、このごろ物忘れが激しくて、失敗ばかりなんですが。それにあなたはお馬鹿ではありませんわ。少し理解が遅くて忘れっぽくて、機転が利かないだけのこと」

(そういうのをお馬鹿というんじゃ……？)

とノエルは思つたが、目の前の無邪気な院長にそう反論する気にはなれない。

魔術修道院長は、純真な少女がそのまま歳を重ねただけといったふうの、白髪まじりの上品な老婦人だ。他の修道女らと同様、幼い頃に魔術の才能を見出され、修道院へ送りこまれた貴族の娘だったのだという。無邪気な性格ではあるが、魔術・薬草・毒物という魔女の必須知識については、王国一詳しかった。

「あなたが昔から一所懸命勉強してたのを知ってるわ。その努力はいつかきっと実るんだから、焦らなくていいのよ。あなたの母さ

まだつて、ちよつと覚えが悪かつたりしたけれど、少しづつ上達してああも素晴らしい魔女になられたんだもの。そういうえばあなたの母さまと、よく冗談でこんなことを言つたものだわ。『魔女の石』があれば、すぐに偉大な魔女になれるのにね、なんて。あの頃はほんと、馬鹿なことばかり言つてて、でもとつても楽しかつたわ……

「『魔女の石』？ それはいつたい何ですか？」

「あ、まだあなたには話してなかつたわね。実をいうとこのことは、王族と魔術修道院長しか知つてはならない秘密なの。でももうあなたも十六歳だし、教えてもいい頃合いかもね。……『魔女の石』はね、いにしえの偉大な魔女が用いたという、魔力を秘めた聖なる石なの。これさえあれば、魔力を増大できたと言われるわ。代々の魔女王がそれを継承してたんだけど、レムロム帝国がここを侵略してきた際に、それを奪われるのを恐れて、妖精に頼んで隠してもらったの。その後この地はレムロム帝国の植民地になつて、魔女王の継承も途絶えてしまつて。あげく、『魔女の石』をとりかえす方法が分からなくなつてしまつたの」

「え、でも妖精たちに預けたのなら、返してもらえばいいんじや……？」

ノエルの問いに、院長は苦笑いを浮かべた。

「それがね、妖精というのはすごく頑固な種族だから。『われらにこの宝物を預けたのは本物の聖なる魔女だつた。だから再び本物の魔女が現れたときだけ、これを返そう』と、こうだつたそうなの。ほら、かつて最後の魔女王がレムロム皇帝を毒殺したでしよう？あのときに帝国の命令で当時の魔女は皆殺しにされてしまつて、本物の魔術の継承方法は分からなくなつてしまつたわ。いま私たちが用いているのは、ほんのささいなわざだから。だから妖精は私たちを、本物の魔女だとは認めてくれないの」

そのときノエルの脳裏に、先日のあの光景がよみがえつた。

「——あ！ わ、私、ある妖精との前知り合いました！ ジェイミーっていう名前のヤドリギ妖精で。彼が私の馬と同じ名前だから

覚えてたんですね！　その妖精が、私のことを『本物の魔女だ』なんておかしなことを言つてて……！」

衝動的に言いかけて、ノエルは恥ずかしくなり口ごもった。落ちこぼれの自分が「本物の魔女」と言われたなどと。あの妖精の勘違いに決まっているのに。

だが院長は、そのことにかなりの関心をひかれたようだ。目を輝かせて、ノエルに尋ねる。

「『本物の魔女』？！　ねえレディ・ノエル、その妖精がたしかにそう言つたのね？」

「いえでも、あの妖精の勘違いです、きっと。私が本物だなんて、おこがましいし。『ディー』のことを言つたなら、すぐ納得できるんですけど」

すると院長は、ノエルの手を握りしめて、興奮しきつたようすで声を上ずらせた。

「いいえ！　妖精は勘違いなんてしませんよー　ああ、ついに、ついにこの地に本物の魔女がよみがえったんだわ……それがあなただつたなんて……本当にすばらしいわ！」

いつになく感情のたかぶつた院長のようすに、ノエルが呆然としている。

「レディ・ノエル。妖精たちは近いうちに、必ずあなたにコンタクトをとりにくるでしょう。そうしてあなたを認めてくれたなら、『魔女の石』を返してくれるはず。彼らはそういうことには律儀な種族だから。それまで心して待ちましょう」

ノエルは驚きつつも、院長に尋ねた。

「あの……もし本当にそつなら。私が『魔女の石』を受けとれるのなら。こちらから返してもらいに行つてはいけませんか？　その石は魔女の力を増大させるんですよね？　だったら私、その『魔女の石』の力で、はやく一人前の魔女になりたいんです。もうすぐディーがローランド王に嫁いでしまう。そうしたらこの国を守れる魔女はいなくなってしまうわ。だからすぐにでも私が――！」

「レディ・ノエル。…… そうだったのね、だからあなたはお馬鹿を治したいなんておっしゃつてたのね。でもね、焦つてもしかたないの。妖精は誇り高いから、こちからから『返せ』なんて言えぱつむじを曲げてしまつわ。向こうから来るまで、待つのが一番なのよ」

「でもそんなことを言つて、もしまだアンクウが襲つてきて、ディガこの地にいなかつたらどうするんですか…… つ？！」

「そのときは私が頑張るわ。きっとなんとかなるわよ、私たちには神がついておられるのだもの」

どこまでも楽天的な院長には、いちじるの焦りは伝わらないらしい。あきらめたノエルが辞去しかけると。

「ねえ…… レディ・ノエル。あなたのお母さまは、あなたを生んですぐ亡くなられたけれども、最後にこつ私におっしゃつたの。『ノエルは選ばれた子よ。いつかハイランドを救つわ』って。だから焦る必要はないわ。あなたのお母さまの予言は、いつでも正しかったのだから」

やう告げてきた院長は、確信にみちた表情を浮かべていた。

ノエルは夜の森に、ひとり足をふみ入れた。夜鳥や虫の鳴き声、獣たちが草をかきわける力サカサという音、そしてノエル自身が枝や落ち葉や土をふみしめる音。それらにいちいちドキドキしながら、ほの明るいカンテラを頼りに、森の奥へと進んでいく。

エイデンヴァ ランド城には正門と裏門以外にも、限られた者しか知らない地下通路が、ふもとの森へとのびている。その通路をたどりノエルがここにいることに、今のところ気づいた者はいない。魔術修道院長にも内緒で、彼女は行動を起こしたのだった。

もちろん目的は、妖精の預かっているという「魔女の石」である。ここは妖精の住まう森。こうして夜におとなえば、彼らはノエルに接触していくかもしれない。そうしたらあのジェイミーという妖精に仲立ちしてもらい、「魔女の石」を返してもらうのだ。

（……院長さまはああ言われたけど、私は待つなんてできない。すぐにも力が欲しいんだもの）

元来のんびりした性格のノエルが、こうも追いつめられるのは珍しい。だが彼女は目の前で、アンクウによつて傷つけられていく城兵らを見てしまつたのだ。あのときは、何もできない自分が歯がゆくてならなかつた。

「魔女の石」さえあれば、強大な魔力で、皆を守れる力が手に入るかもしけないので。

（またあの不思議な人が、助けてくれるとは限らないものね……）

先の城門の戦いで、アンクウからノエルを救つてくれた謎の青年。彼については、まだ何も分かつていない。あの救い主はそもそも、どこから来てどこへと去つたのだろう？　ここしばらく、城内でそれとなく探したけれども、それらしい人物はどこにもいなかつた。彼の衣の香りをまだ覚えている。不思議な花の香り。そして彼は

ノエルに、香りのみならず強烈な印象を残していた。その姿も名前も年齢も、なに一つ分からぬままだというのに。でもあのノエルを抱いた腕の力強さは、たしかに現実に存在する生身の人間のものだった。

「 よお、魔女さん、こんばんは。どうしたい？ こんな夜中に、野太い男の声が、いきなり頭上からふりかかった。予想していたとはいえ、ノエルは思わず悲鳴をあげ、カントラをとり落としてしまった。

どすん、と地響きをたてて、巨体がノエルの目の前におり立つ。「なんだよ、そう驚かなくても。俺だよ、この前のジョイミーだよ！ あんときは『めんな、ちょっと驚いてさあ……』だってあんた、普通じやねえもん。びっくりしたんだよ、じつちも」意味不明の言い訳をしながら、ジョイミーはカントラを拾い上げてノエルに手渡してくれる。

筋骨隆々、見上げるような巨体のヤドリギ妖精が、ぎこちない笑みを浮かべてこちらを見下ろしている。カントラの明かりに浮かぶ、いかつい顔に浮かんだ笑みはちょっと怖い。

だがノエルは努力して、その恐怖にうち勝とうとひとめだ。

「こ、こんばんは、ジョイミー。私はノエル・フレイザーといいます、よろしくね。じ、実は今夜は……」

「ん、分かつてゐぜ。あんた、『魔女の石』をどうに来たんだう？」イーレンがそう言つて、俺をじこく迎えによこしたんだ。む、ついてきなよ」

「 え？！ 分かつてた？ そ、それつていつたい…… イーレン というのは、どなたですか？」

「ん~、それはまあ、あとで。とにかくあんたを連れてくるよ、奴が命令しやがったんだよ、まったくよお。ちょっと強いからって、威張りくさりやがつて」

ぶつくせ言つと、ジョイミーはしばしためらつてから、ノエルの手をとつた。「やっぱあんたの力は、ふつうじやねえ」と奇妙なこ

とをつぶやきつつ、手近な木の幹にふれる。

「おい、門兵のジョイミーだ、開けてくれ！」

彼がそう怒鳴ったとたん、目の前の光景が一変した。

森の暗闇に突然、輝ける靄が出現したのだ。

きらきらと輝くその中へ足をふみ入れると、驚いたことに別世界が広がっていた。森の中ではない、山と湖に囲まれた広大な台地に建つ壮麗な宮殿が、こちらを見下ろしている。月星の明かりが、あたりを銀色に照らし出していた。

どうやらあの輝く靄は抜け道で、森から別世界へと来てしまったようだ。

「あ、あれが妖精の宮殿……？ 素晴らしいわ、まるで細密画で見た異国之城みたい！」

青緑色の屋根に白亜の壁、針のような塔やアーチ型の窓がつらなり、あちこちに華麗な彫刻がほどこされている。昼の光で見たなら、さぞや麗しいことだろう。ノエルは思わず感嘆の声をあげていた。「そりや、あんたらの『ごつい』つした不恰好な城とは、比べものにもならねえだろうな。俺たちは美意識が高いから、さ」

ジョイミーは得意げに言いながら、ノエルを城の正面の楼門へとみちびいた。重々しい音をたてて城門が開き、二人は中へと招き入れられた。

妖精の城。ここへ足をふみ入れた人間は、ほとんどいないに違いない。なぜならいかななる書物にも、この様子は書かれていなかつたからだ。

埃と汚れ、生活感あふれる匂いでみちた人間の城とは異なり、妖精たちの宮殿は作り物めいて美しかった。もちろん汚れたところなど全くない。

城内にいるのは、緑の髪に緑の目に青白い肌、ほつそりとした優美な姿の妖精たちだ。皆、ふんわりした薄手の白い衣装をまとい、まるで聖堂の天使の絵のように清らかに見える。

中には銀色の薄い羽を背中に生やしている者もいたが、人間だと

十代以下に見える少年少女ばかり。どうやら大人になると、その羽が消えてしまうものらしい。

妖精らは華奢なものばかりという印象だが、ジェイミーのような筋骨たくましい者も幾人か見かけた。きっとこの城を守る戦士たちなのだろう。

ジェイミーは城主塔らしき建物へと、案内してくれた。

「ようこそ、レディ・ノエル。あなたが『偉大な魔女』の再来なのですね。……たしかにあなたからは、なみならぬ強い力を感じるわ」迎えてくれた妖精女王は、人間でいう十歳ほどの容姿をしており、金色の羽を生やしていた。ひどく可愛らしいが、きっとこれでもノエルよりずつと年上だつたりするのだろう。

ノエルは丁重に膝を折り、貴婦人としての挨拶をした。

女王は彼女の手をとり、上機嫌で言つ。

「『魔女の石』を預かつたのは祖母の代、千数百年前のことです。それをこの私が本物の魔女に引き継げるとは、光榮なことだわ」「予告もなくお訪ねしてしまって、申し訳なく思つてます。でもあの、皆さまは、私がここへ来ることを存じだつたようですね？」

『魔女の石』が目的だということも？」

ノエルが問いかけると、女王はくすくす笑つた。

「少し前からここには、ある高貴な客人がおられるのです。あなたの来訪とその目的を教えてくれたのは彼よ。『魔女の石』は、彼からあなたにお渡しすることになつてゐる……きっと上階で、いろいろしながら待つてるわ。さあ、『案内します』

状況がつかめず呆然とするノエルの手をひき、女王はらせん階段へとみちびいた。

階下で待つよう女王に指示されたジェイミーは、やや不満げな表情でこちらを見送つてゐる。当然、ノエルについていけると思つていたのだろう。

彼に軽く手をふつてから、ノエルは女王につづき、階段をのぼりはじめた。

(さつきジョイニーは、「イーレン」という人が私を迎えてやらせたって言つてたわ。ということは、女王の言つお客人がそのイーレンさんなのね。どうして私のことを知つてるんだろう? その人は「魔女の石」とどう関わりがあるの?)

疑問を山ほど抱え、わけもわからないまま上階へつくと、厚い絨毯と美麗なタペストリー、それに金銀の調度品で飾られた広間に通された。ノエルの父王の城など、足元にも及ばないみごとさである。その広間へ足をふみ入れるやいなや、ノエルは覚えのある香りを嗅ぎとつた。甘く神秘的な花の香り。頭より体が覚えていたその薫香は、あの城門で救われた際に、謎の青年がまとっていたものだ。

「イーレン、お待ちどうさま。レディ・ノエルがいらしたわよ!」

女王が声をかけると、暖炉のそばの椅子にかけていた人物が立ち上がつた。暗色のマントをすっぽりとかぶつた後姿。それを見て、ノエルの胸が驚きと喜びで高鳴つた。

ノエルは深々と膝を折り頭を下げ、貴婦人としての礼をとつた。心臓が飛び出しそうな勢いで、どくどくと脈打つている。

彼の近づいてくる気配がした。足音はせず、優雅な衣擦れの音だけがさらさらと聞こえてくる。

「先の城門での戦いの際は、名乗りもせずに失礼いたしました。私はシア・イーレンと申します」

どきどきしながら、ノエルは顔を上げて そして声を失つた。あの城門での戦いで、アンクウから救つてくれた彼は、青年ではなかつた。

上背があり姿勢もよく、その漆黒の瞳は活き活きとして力強い輝きを放つていたけれども。

フードをおろした彼の容貌は、老人のそれだつたのだ。

イーレンと名乗ったその老人は、見慣れぬ格好をしていた。裾の長くゆつたりとした、合わせ衿の衣装。その上質な黒のシルクは、異国めいたデザインの花葉紋様を銀色に浮かびあがらせている。結つて頭頂で留めた白髪に、珍しい形の冠をかぶっていた。

東方渡りの陶磁器に、このような装いの人物が描かれていた気がすると、ノエルは思い出していた。彼は東方人なのだろうか？老いているとはいえ、また異国的な顔立ちとはいえ、彼には気品と風格が備わっていた。かつてはエキゾチックな美貌の持ち主だつただろう……五十年ぐらい昔には。

驚きとともに、どこかで落胆している自分を感じとつて、ノエルは混乱した。

「……あ、あの時は、助けていただいてありがとうございました。あの、私をここへ招き入れてくれたのはあなたなんですね？　どうして私がここへ来ると、お分かりだつたんでしょうか？」

イーレンという老人は、どうやら愛想のかけらもない人物らしい。にこりともせずにノエルを見下ろして答えた。

「私は妖精たちに、あなたを見張らせていましたのです。あなたが私の求める主かどうかを見極めるために。だからあなたがここへ来る目的も、すべて分かつてました」

意味がよくのみこめず、ノエルは混乱した。

「見張らせてたつて——あ、主つて、いつたいどういうことですか？」

「話せばだいぶ長くなりますが……つまりはこういふことです。世界に調和と安定をもたらすために、『天』は　いや、あなたがたの言つところの『神』は、『偉大な魔女』をこの地上につかわした。私はそのお方を守る義務を負う者です。そしてその魔女とはあなただろうと、私はほぼ確信しているのです」

ノエルはなんと答えていいのか、分からなくなつた。なんだかとんでもない話になつていて、自分がそんなたいそうな存在のはずがない。落ちこぼれ魔女の自分が。

「あ、あの、せつかくですが、私はそんなすごい能力はないんです。どうして私があなたのお探しの魔女だと思われたんでしょうか？」

ノエルが尋ねると、イーレンと名のつた老人は、ぱちんと指を鳴らした。すると吊り燭台にとまっていたらしい小鳥がおりてきて、鳴き声をあげつつ彼の指にとまる。

それは、灰色の冴えない羽をもつ小鳥だった。その赤い小さな瞳で、じつとノエルを見つめる。やがてチイチイと鳴き声をあげて飛びあがり、ノエルの肩にとまつた。

「かわいい！」  
「いい子ね」

肩にちょこんととまり、見上げてくる小鳥に愛しさをおぼえたノエルは、思わずそうつぶやいていた。

「それはココという名で、神のつかわした魔女を見つけだす使い鳥。それがあなたのもとへ、私をみちびいたのです。ココがあなたをその魔女だと認めたのだから、間違いないはず。」

と、イーレンに言われても、ノエルに信じられるはずもない。腑に落ちないという顔をした彼女を、イーレンは広間の隅へといざなつた。

そこにはレースのクロスのかかつた小テーブルがあり、宝石箱ほどの大きさの金の箱があった。箱は宝石で飾られたみ」となものだつたが、中にはひどく不恰好な石がおさめられている。荒れた木肌のようにごつごつとして黒ずんだ、橢円形の石だ。

「これがもしかして……『魔女の石』なんですか？」  
想像と違つていたのに驚きつつ、ノエルが尋ねると、イーレンはうなずき、「それに触れてみてください」とやわらかな口調で命じた。

「あの……私などが触れても、大丈夫なんですか？」

「もちろん。それはあなたを待っていたものなのだから。『偉大な魔女』だけが、この石を本来の姿に戻すことができる。この石ならば、あなたが私の探し求めていた主だという証を見せてくれるでしょう」

イーレンの確信めいた口調に首をかしげつつ、ノエルはそつと「魔女の石」にさわった。

しばらくそのじつじつとした表面をなでたが、何も起こらない。ノエルは失望と安堵を同時におぼえつつ、イーレンのほうを見た。「あの……イーレンさま、やっぱり何も起こりません。私はあなたのおっしゃるような魔女ではないと」

そのとき、奇跡が起きた。「魔女の石」がノエルの手の下で振動したのだ。ふるりと震えたのを感じとり、驚愕した彼女が手を離そうとすると、

石がまばゆい光を放ちながら、かたかたと揺れはじめた。

「——素晴らしいわ、今まで誰もこの石を目覚めさせることはできなかつたのに！ 古代の偉大なる魔女たちにだつて、できなかつたことよ！」

背後から、興奮した妖精女王のはしゃぎ声が響く。

ノエルが恐れて手を放そうとすると、すかさずイーレンがとどめた。

石の振動と光とは、どんどん強まっていく。

そうするうちに、まもなくノエルのうちに、変化が生じはじめた。石に触れた指先が熱い。自分の中に波のうねりのようなエネルギーが生まれ、奔流し、どこかへぶつかって波濤となつて砕け散るような感覚をおぼえた。こんなのは初めてだ。

何かが変化しようとしている。かるうじてノエルに分かるのは、そんなことだけだった。

石の放つ光はますます強まり、広間中が白い光に包まれた。

同時にノエルの中のエネルギーも、行き場を失つた波のごとく荒れ狂う。

「どうやら種が本当に目覚めたようだ。これが、あなたが『偉大な魔女』だというはつきりした証になるな」

「え、種ですって？ ねえイーレン、それっていつたいどうこうじ？！」

近づいてきた妖精女王が、イーレンの袖を引き、興奮したようすで尋ねる。

「これはもともと、石ではない。桃都樹という靈木の種で、育てられるのはとてもない力をもつ者だけだ……レディ・ノエルのよう。この種はこれまでずっと石のような殻に守られて眠つて、自分を育てられる『偉大な魔女』を待つていたんだう。だからレディ・ノエルに会つたことで目覚めたんだ」

しばしの後、イーレンは異国の呪文を唱えつつ、ノエルの手を石から離した。今度は急速に、石の振動と光どがおさまっていく。

やがてそれは黒色のじつじつした石から、アーモンド色のつややかな種へと変じていった。

ノエルは急に、足下がおぼつかなくなり、めまいをおぼえた。種の目覚めとともに、自分も何か変わったような気がする。

得体の知れない膨大な力が、おのれの内からわきあがつてくる。

——怖い！

自分自身に恐怖を感じた瞬間、ノエルは気を失つた。

昨夜のあれはすべて、夢だったのだ。  
エイデンヴァーランド城の主塔の上階、おのれの部屋のふかふかのベッドで目覚めたノエルは、起きぬけのぼんやりした頭でそう結論づけた。

夢だったからこそ、自力でこの城へ戻った記憶もないのに、こうして自分のベッドで朝を迎えたのだ。

妖精の森も、ジェイミーも、妖精女王も、そしてあのイーレンという老人のこともすべて夢。だからノエルが「偉大な魔女」であり、「魔女の石」を靈木の種として目覚めさせたなんてことは、絶対にありえない。

（でも、すごく現実感のある夢だったかも……）

ノエルはあくびをしつつ、ベッドからおりた。

暖炉の前では、侍女たちが湯浴みの準備をしている。薔薇の香油とラベンダーの石けんの香りが、湯気とともにただよってきていた。ハイランドは貧しい国だが天然資源にだけは恵まれており、燃料の薪や泥炭はふんだんにある。よって王族は、毎日入浴するという贅沢を許されていた。

「ノエルさま、ほ、本田のお召し物はこちらでよろしくうございますか……？」

ドレスとベルトを手に、おずおずと尋ねてきたのは、いかにも不慣れそうな新入りの侍女だ。ベテランやきいた侍女らは皆、要領よくディアドラづきの侍女として鞍替えてしまっている。よつてノエルのもとに残っているのは、忠義者もしくは不器用な者ばかりだったのだ。

「ありがとう、あなたに任せるとわ

流行りのファッショնにうといノエルは、素直にうなずいた。

彼女の衣装は、これまで城内でもっともセンスのいいベテラン侍

女が選んでいたが、今ではその侍女もティアドラーの一人となっている。これは大きな痛手だった。なぜならハイランドにはあかぬけたドレスをこしらえる仕立職人がおらず、ノエルの衣装箱の中身は野暮つたい衣装ばかりなので、うまく組み合わせないと田舎くさくなってしまうのだ。

湯浴みを終えて着替えたノエルを見て、侍女たちはうめいた。どうやら、ひどく冴えなく見えるらしい。

本日のドレスは落ちつきすぎた紫色、さらに髪にはくすんだ茶色のリボンという組み合わせである。鏡で見て何かが変だとノエルですら思ったが、選んでくれた侍女を傷つけるわけにもいかず黙つていた。

「ノエルさま、せめてアクセサリーでもおつけになつては？」

年配の侍女が、ため息をつきつつ提案してくる。ノエルは皆の落胆したようにとまどいつつもうなづき、差し出された宝石箱へ顔を向けた。

「えっ？！ この箱つて……？ どうしてこれがここにっ？！」

それは黄金に宝石をちりばめた精緻なつくりのもの 昨夜の夢の中で見た、「魔女の石」が収められていたあの箱だつた。ノエルのあまりの驚きように動搖した侍女が、じどうもどろに説明する。「え、だ、だつて、ノエルさまの衣装箱にあつたものだから、てっきり私……こ、これって宝石箱と違うんですか？！」

ノエルはとりあえずその箱を受けとり、中身を確認した。

「……嘘、みたい。夢じゃなかつたなんて」

そのままへたりこみそうになるのを、ノエルはなんとかこらえた。金の宝石箱に収められていたもの。それは、昨夜の「夢」で見た「魔女の石」だつたのだ。

(これが私の衣装箱にあつたつてことは、誰かがそこに入れたのよね。それに第一、あれが夢じゃなかつたんだとしたら、私はどうやつて富殿からここに戻ってきたの？)

ノエルは侍女らをさがらせた。暖炉の前の小卓にその箱を置き、

そばの背もたれつき椅子に腰かけて考えこむ。

「魔女の石」、転じて「魔女の種」を手に入れるのは、もとからノエルの目的だった。だがいざその種を田の前にして、彼女は困り果てていたのである。

このことを魔術修道院長に相談しようつゝかとも思つたが、困惑させるだけだらうと思つてどまつた。

（『魔女の種』をどう使えば、私の魔力が増すのかしら？　私つてほんと馬鹿よね。これを手に入れさえすれば、後はどうにかなると思つてたんだもの）

ノエルとしては、すぐにでも妖精の森へ行き、イーレンにいろいろと尋ねたいところだつた。ところが。

「の、ノエルさま、陛下が至急、参上するよつことのことでござります！」

侍女があわてた声音で告げてくる。嫌な予感をおぼえて、ノエルは急ぎ父王のもとへ向かつた。

「ノエル、わが優秀なる弟ベリックからまた使いが参つたぞ。ローランド王ウイリアム殿ともども、あと三日ほどでこの城へ来られることになつたようだ。ヴァイキングの残党が、思つたより早く一掃できたらしいな」

かけつけるや父王にそう告げられて、ノエルはめまいがした。たつた三日間。その間にローランド王を迎える準備を、全て完璧にとのえねばならないなんて。

「そうとなつたら、まずは城内の大掃除ね。床のイグサは全部とりかえさせて、タペストリーもより優雅なものにかけかえさせましょう。それから宴会の支度も。冬に蓄えを使い切つてしまつたから、今この城にはわずかな量の猪肉と鴨肉ぐらいしかないわ。香辛料だって、生姜と胡椒がほんのわずかにあるぐらい。ワインもビールもないし……ああ、急がなくては！　ノエル、あなたにも手伝つてもらうわよ！」

アンガス王の言葉を聞くやいなや、やはりその場にいたティアード

ラが、まるでここに女主人であるかのように仕切りはじめた。

本来ならノエルこそがこの城をとりしきるべきなのだが、ティアドラが来てからといふもの、その座はすっかり奪われてしまつている。

アンガス王はかすかにため息をついたが、何も言わなかつた。こういった支度を、ノエルよりもティアドラのほうが上手くやりおおせるだらうことは、火を見るよりあきらかだ。ノエルの父王としても、文句をつけるわけにはいかないのだろう。

「それからノエル、ローランド王の前でそんなみつともない格好だけはよしてね。最近、なんだかやたらと田舎くさい格好ばかりしてゐるけど、今日は特にひどいわ。なんなら私のドレスを貸してあげるから」

やつぱり今日の装いは、野暮つたかつたらしい。たぶんドレスを貸してもらつても、ノエルとその侍女らではうまく着こなしができないような気がする。

ノエルが困惑するそばから、ティアドラがてきぱきと指図をしてきた。

「まあ、ドレスのことは後回しでいいわ。それよりもまず、城の準備ね。ノエル、あなたは城内の床と壁、それからトイレ掃除の監督をしてもらつわ。私は料理の準備と室内飾りを監督するからー。」

それからの三日間、ノエルは客人を迎える準備で大わらわだつた。もちろん、「魔女の種」のことで妖精の森へ行く機会はなく、それは彼女の衣装箱の中に大切にしまつこまれたままとなつた。

ローランド王ウィリアムは、淡い金髪にアイスブルーの瞳をした、古代の美神めいた青年王だつた。しかしその見た目とは裏腹に、気どりのない人懐こい人柄で、無骨なアンガス王すらもすぐにうちとけたほどだつた。

エイデンヴァーランド城の、大広間。賓客を迎えての晩餐は、予想に反して楽しいものとなつていて。すべてはウィリアムの氣さくで飾らない性質のおかげだ。

「今後しばらく、レディ・ノエルとレディ・ディアドラのよつにお美しいご婦人がたと共に過ごせるのなら、むさ苦しい野郎ばかりの旅路をたえしのんだ甲斐もありますね。ノエルさまが陽光の女神、ディアドラさまは月光の女神といったところかな」

酒がまわり、主卓についた客も主人も、ほろ酔い気分で軽口をたきあうようになった頃。ウィリアムにあっけらかんと讃め言葉を口にされ、無骨で無口な武人らに囲まれて育つたノエルは、思わず照れて赤くなつた。

「お上手ですね、ウィリアムさま。でもそのような世辞でおだてなくとも、きちんとおもてなしするつもりですわ、私たち」

ディアドラが「冗談交じりに返すと、まわりの者らがどつと湧いた。ノエルはといふと、ウィリアムのほめ言葉への気のきいた返事も浮かばず、目の前の肉料理に夢中なふりをしてやりすごした。

「やれやれ。ローランド王は二人の花嫁候補どちらもお気に召したようだ。ですが嫁がせられるのは一人のみですぞ、お忘れなきよう」

如才なく口をさしはさんだのは、王弟ベリックである。不器用で言葉を飾らない兄アンガス王とは違い、ベリックは弁舌巧みな男だつた。嫡子であるアンガスにひきかえ、彼は先代王が気まぐれに手をつけた侍女の子である。その引け目ゆえに小賢しさが身についた

のだと、陰口をたたかれたりもした。

しかしそんなベリックも、今や病氣の王にかわってヴァイキングを破った英雄とみなされている。その娘、ディアドラともども、評判は高まるばかりだった。

「まあお父さま、そのような直接的な言い方をなさると、ウイリアムさまに呆れられてしましますわよ。ウイリアムさま、お許しくださこましね。父ベリックはこうしてあなた様とともに都に凱旋できただことが、嬉しくてならないのです。それでいつになく舞い上がりてしまつてるんだわ。　さあ、お次はデザートですわ。私が腕をふるいましたの。お気に召していただけるといいんですけど」

ディアドラが麗しい笑みを浮かべつつ、給仕の運んできたイチジク・プディングを、ウイリアムの皿にとり分ける。カスターードクリームに赤い薔薇の花びらが彩りをそえたプディングに、ウイリアムは感嘆の吐息をもらした。

「僕は甘い菓子に目がないんです。たまらないなあ、これは。ううん、香りも絶品」

ウイリアムがひと匙すべりては、「ううんと唸る。

その隣席のアンガス王も、このプディングには目を細めつつ、さっそく匙をつけていた。病をおして晚餐の席についてはいたが、ここまでほとんど食べられずにいたというのに。それだけディアドラの菓子作りの腕前がすばらしいということなのだろう。

ノエルは口の中でとろけるクリームにうつとりしつつ、ウイリアムに給仕するディアドラに賛嘆のまなざしを送った。

若きローランド王ウイリアムは、誰をも魅了するような笑顔で、ディアドラに軽口をたたいている。ディアドラのまほろまんざいではない様子。なかなか良い雰囲気だ。

（よかつた……ウイリアムさまは妻をひどい目にあわせるようなお方じやないみたいだもの。ディアドラが不幸になることはないわね。きっと、似合いの夫婦になるわ）

ディアドラとウイリアムをちらちらと見やりつつ、麗しい一人の

盛大な結婚式のようすを予想して、ノエルはうつとりした。

これから正式に同盟締結の文書にサインを交わし、その後の数日間はローランド王の歓迎行事が毎日なにかしら催されることとなる。そしてその間にウィリアムに、ノエルがディアドラを花嫁として選んでもらうという、暗黙の了解が成り立つていた。

とはいっても、ハイランド側の誰もが、花嫁はディアドラになるだろうということを、信じて疑いはしなかった。ウィリアムとの初対面の挨拶時にすら、ノエルの不器用さとディアドラの優雅さとは、好対照だったのだから。

この晩餐会での二人の装いもまた、あまりにも差が目立つてしまっていた。アメジスト色の瞳に合わせて薄紫のドレスをまとうディアドラは、女王のごとく気高く優美だ。対してノエルはといふと、鮮やかな赤のドレスに深緑のリボンをこじごじと飾りつけた、品のない装いである。衣装もリボンもディアドラからの借り物だったが、センスのない組み合わせのせいで、それらの品は台無しになってしまっていた。

これでウイリアムがノエルを選ぶようなら、彼の美的センスが大いに疑われるところだろう。彼がティアドラを選ぶだろうことは、火を見るより明らかだ。

だがノエルの心は平和だった。もとよりティアドラと競つても仕方がない。

(二人がむつまじい夫婦になれば、両国の平和は保たれるわね。  
あとは私が、一人前の魔女になればいいだけ。早くイーレンさまにお会いして、あの種の利用方法をお尋ねしよう)

あの夜、妖精の宮殿でイーレンたちと出会つてから、すでに七日が過ぎようとしているが、ノエルはなんら行動を起こせていない。ローランド王一行を迎える準備で、おそらく忙しかつたせいだ。

いつのまにか届けられた「魔女の石」ならぬ「魔女の種」は、今も大切にノエルの衣装箱にしまわれているけれども。その利用方法が分からなければ、話にならない。もう一度妖精の宮殿へおもむ

き、イーレンたちに会わなければ。

（……それでも、考えれば考えるほどおかしいわ。イーレンさんは、城門の戦いで初めてお会いしたときは、まるで若者のようなお声と体つきだったような気がするのに。どうして急に、ああも老けこんでしまわれたのかしら？ もしかしたら魔術で、若返ることができるお方なのかしら。まさかとは思うけど）

ささいなことではあるが、ノエルは気になつて仕方がなかつた。城門の戦いで助けてくれたあの人人が老人だつたとは、とても信じられないのだ。……いや、ただ信じたくないだけなのかもしれない。（でもそれって、イーレンさまが老人なのが嫌だつてことよね。我ながらすごく失礼だわ。命の恩人に対しても……）

「——ノエル！ 何、ほ、ほつとしてるの？！ ウィリアムさまに失礼でしよう？」

ディアドラのいらだたしげな口調にふと顔を上げて、ノエルは周囲の痛いほどの視線を感じた。どうやらディアドラの向こうの席についたウィリアムが、ノエルに話しかけてきていたらしい。

ノエルは慌てた拍子に、持つていたスープの匙をテーブル下へ落としてしまつた。王家の者らしからぬ不作法に、どうとうくわつかと焦つていると、

「驚かせてすみません、レディ・ノエル。僕はあなたも魔術槍試合に参加されるのかと、お尋ねしたんですよ」

ウィリアムが人なつこい笑みをたたえて、問いかけてくる。匙を落とした不作法など、氣にもとめてないようだ。

魔術槍試合。ウィリアムの言葉でそのことを思い出して、ノエルの表情は曇つた。

それは、いにしえからこのハイランドに伝わる行事で、特別な祭りのときにだけ催されることになつていて、たとえば王の戴冠式や結婚式、重要な賓客を迎えたときなど。

ウィリアムの歓迎行事として、明後日にそれは開かれることが決まっていた。もちろん、ノエルも参加することになつてはいたのだが

……。

この行事は、一見するとふつつの馬上槍試合とそつ変わらない。武装して馬にまたがり、長い槍をかまえた騎士らが作法通りに激突するという。だが魔術槍試合の場合、騎士たちには組ごとに魔女がついており、魔術で援護することになっている。たとえば雷や炎の衝撃波で敵をひるませるなどして、おのれの組を勝利へ導くのだ。よつて騎士の力量よりも、魔女の能力のほうがより重要となつてくる。ディアドラと組む騎士には、勝ちが約束されたようなものだ。明後日の試合で、ディアドラはハイランドでもつとも武芸のほまれの高い氏族と組むことが決まっていた。

ところがノエルはと、魔力の弱い彼女と組みたがる騎士団が見つからずにいたところだつた。明後日までに何とかしなければ、ノエルは出場辞退という形になつてしまつ。

「ええ、参加したいと思つてゐんですけど、組む相手の騎士団が見つからなくて」

魔術槍試合へ出るのかと尋ねたウイリアムに対して、ノエルは正直に答えた。

ウイリアムの隣にかけるアンガス王が、ふんと鼻を鳴らす。ノエルと組もうとしない騎士らのふがいなさに、いらだつているのだ。だがこればかりは王が、誰かに強制できるものでもない。魔術槍試合には、魔女だけでなく騎士の名誉もかかっている。そもそも負けると分かつていて、ノエルと組むようなお人好しはない。

ノエルの魔術の腕前がお粗末すぎて、誰も組みたがらないのだという事実を、ウイリアムはすぐに悟つたようだつた。しばらく彼は、じつとノエルを見つめていたが。やがて思わぬことを口にした。

「わが国には魔術槍試合のようなものはないんです。魔女がいないから。だから僕も参加させていただきたいんですが、……レディ・ノエルが組んでくれませんか？」

思わず申し出に、あたりの者らが驚きの声をあげた。

「なりません、ウイリアムさま！ ノエルの魔術は本当にお粗末で

す。きっと、試合でウイリアムさまに怪我をさせてしまつわ…」

「ディアドラが悲鳴のよつた声をあげる。あんまりな言いよつでは

あつたが、だが事実だ。皆、口には出さずともディアドラと回じこ

とを考えていた。

ノエルだつてそつだ。ウイリアムと組んで、もしも怪我でもさせようものなら……両国の同盟さえも潰えてしまつかもしれない。

「あの、ウイリアムさま、お申し出は嬉しいんですけど……」

「ウイリアムさま、ノエルには無理なんです。その証拠をお田にかけますわ。さあ、ノエル。あなたが落とした足元のスプーンを、魔術で拾つて『らんなさい』

ノエルの不器用な断りの文句をむかえるように、ディアドラが言う。ノエルは一瞬たじろいだが、自分が先ほどテーブル下に落としたスプーンに目を落とし、やつとディアドラの意図を悟つた。ノエルの魔術がいかに拙いかを、実際にウイリアムに見せて思いとどまらせようというわけだ。

小物を動かすことは、『ぐぐく初級のわざだ。それでもノエルの技はたゞたゞしく、すぐには落としてしまう。皆の前で自分の拙さを披露するのは恥ずかしかつたが、ウイリアムを説得するためにはやむをえない。ノエルはしぶしぶ、スプーンを動かそうと呪文を唱え始めた。

ハイランドの魔女たちは、いにしえの時代から呪文で魔術を行つていた。オガム語という古代の魔術語を用いて、物質に働きかけるのだ。スプーンにはオガム語での名前があり、それを用いて呼びかけねばならない。またその物質によつて呪文の文法が異なつてくるので、木のスプーンに対して正しく樹木の文法で呼びかけなければ動かせないのである。

ノエルがようやく、正しいオガム語でスプーンに呼びかけると。床のイグサの間でカタカタと動きはじめたスプーンは、いきなり宙に浮かび上がつたかと思うと、すぐにまた落ちてしまつた。失敗だ。やりなおそつとすると、それを制するようにすばやく、ディアドラ

が呪文を唱えた。すぐにスプーンは、かたわらで空の皿を片づけていた給仕の盆に、ひょいと乗る。

給仕が驚きの表情を浮かべるのを見ながら、皆はディアドラへの拍手を送った。アンガス王だけはノエルのために表情をくもらせ、拍手をしようともしない。ノエルはといふと、真っ赤になつてうつむくしかなかつた。父王に恥をかかせてしまったのが、心苦しかつた。

「ご覧の通りですわ、ウイリアムさま。ノエルには魔術槍試合はまだまだ難しい段階です。もしよろしければ、私がウイリアムさまの魔女にならせていただきますわ」

ディアドラが申し出る。

だがウイリアムはじつとノエルを見て、答えた。

「……いえ、レディ・ディアドラのお申し出は嬉しいんですが。残念ながら僕は魔術槍試合は初心者です。きっと失敗ばかりして、ご迷惑をおかけしてしまうでしょう。その点、レディ・ノエルも今は修行中でおられるようだ。誰だって多くの失敗をしなければ成長できないわけだから、僕はレディ・ノエルと一緒に組んで、心おきなく互いに失敗したいんですよ。どうでしょうか、レディ・ノエル？ 僕の特訓におつき合いいただけませんか？」

ウイリアムは自分をかばつて、そう言つてくれたのだ。ノエルはその気持ちが嬉しくはあつたが、承諾するわけにはいかない。

「そんな……でも私のせいで、ウイリアムさまがお怪我をなさるかもしれないんですよ？ 大切なお客様に、そんな危険な真似はさせられません」

「試合で怪我をするのは、魔女ではなくその騎士自身の責任ですよ。下手な戦い方をするから怪我を負うんだ。大丈夫、危うくなつたらすぐに降参しますから。僕としても、こんな美しい花嫁候補が一人もいるのに、結婚前に死ぬのはごめんですから」

ウイリアムの冗談に、皆が笑い声をもらす。

「……ノエルよ、ウイリアムどのがここまで仰るのだから、断るの

は無礼といつものだ。『迷惑をおかけしない程度に、ともに戦つてみてはどうだ?』

アンガス王がそう言つたことで、ことは決まった。

「それではレディ・ノエル、明後日の試合に備えて、明日少しだけ練習におつき合いで下さい」

ウイリアムに言われ、ノエルは落ち着かない気分になりつつも、うなずいた。

隣のディアドラがどがめるような眼つきでちらちらを見ていたが、どうしようもなかつた。

(「どうしたらいいの…… 明日はどこかへ身を隠そうかしら…… でもそれじゃ ウィリアムさまに失礼になるし）

ウィリアムに魔術槍試合で組むよう申し込まれた、翌日の晩。ノエルは私室のベッドに座り、ひざに「魔女の種」を抱えたまま悩んでいた。

この日の昼間は、ハイランドとローランドが正式に同盟文書にサインを交わし、今後の方針をさだめる会議が行われた。ようやく夕方にそれが終わってから、日が沈むまでの間、ウィリアムとその騎士団とともに、魔術槍試合の練習をしたのだが。

ノエルの魔術はあまりに拙く、誤つていきなり小さな雷を発生させた結果、ウィリアムの馬が驚き、彼が落馬するという事態すら起ってしまったのだった。幸い彼はかすり傷で済んだけれども。（「のままじや、いや試合になつたら呪文すら忘れてしまいます。」）そしたら敵方の魔術への防御もできなくて、やつぱりウィリアムさまに怪我させてしまつ。どうしたら穩便に、とりやめなことができるのかしら？）

深いため息をつく。手の内の「魔女の種」をなでさすつてみたが、何ら反応はない。

「——レディ・ノエル。あなたは考えすぎだ。それでは本来の力は發揮できない」

突然、どこからか声が聞こえてきて、ノエルは飛び上がりそうになつたが。

あの神秘的な花の香りをかぎとつたノエルは、声の主が誰かを知つた。いかなる香水よりも上品で優しく、うつとりするような魅力を秘めた香り。

「驚かせて申し訳ない。あなたが助言を求めておいでなのつだつたので、つい

ノエルの私室は、海に面してちょっとしたテラスがついている。

そちらから人影がひとつ、部屋の中へとしづかにすべりこんできた。

「……イーレンさま！ ど、どうして？ どこからここへ？」

入ってきたのは、悪霊との戦いでノエルを救つてくれた人。妖精の森で再会した、あの老人だった。いつたいどうやって、この堅牢なエイデンヴァーランド城の中へ忍び込んだものだろう。

驚き立ち上がったノエルの前に、悠然と彼は近づいてきた。

「イーレンさま。私、あなたに会つてお尋ねしたかつたんです。『魔女の種』のこととか……！」

「あの晩、あなたが妖精の宮殿で気を失つたので、私はあなたをここまで送つてきました。その際に『魔女の種』も持つてきました。それからずっと、私はこの城にひそんでました。あなたをお守りする必要があつたので」

「え、ええええっ？！ ずっと、ここにいらしたの？ 守るつてどういうことですかっ？！」

驚き混乱するノエルを、イーレンは真剣なまなざしで見つめてきた。

「前にも言ったように、私は『偉大な魔女』たるあなたをお守りするため、ここにいる。そして……気づいておられないようですが、あなたには今、大いなる災いが近づいている」

彼に冗談を言つているような気配はない。ベッド脇の口ウソクの明かりに浮かんだその表情は、真剣そのものだ。

「ど、どういうことですか？！ もしかしてまた、悪霊の船団が襲つてくるの？ それともヴァイキングが？」

焦ったノエルは矢継ぎ早に尋ねた。

イーレンはそれを片手で制すると、淡々と説明し始めた。

「いや、敵は城外ではない。この城には今、多くの者らの思惑がうごめいていて、それらが複雑にからみあつていて。その謎を解きほぐすまでは、あなたにお教えるのを控えます。レディ・ノエル、私はしばらくここへとどまって、陰ながらあなたをお守りします。

だからあなたも、私のことは誰にも明かさずにおいてください」

「え……でも、どちらへ身をひそめるおつもりですか？ よければ私が、こつそりお父さまにお願いしてお部屋を」

「いや、目立つわけにはいかないので。さいわいここには、あなたのお父上が招いた道化師たちが大勢いる。実をいうと私は、彼らにまぎれてこの島へ到着したのです。その後は妖精の宮殿にひそんでましたが。とにかく、道化師には異国の者らも多いし、その中にいれば私が目立つ恐れはない」

そうまでして守らねばならないほど、自分は危うい状況にいるのだろうか。そう思うと、急に悪寒めいたものをノエルはおぼえた。もしかしてヴァイキングの手先が、この城の中にひそんでいるとかも……？

「イーレンさま、私、敵がどこにいるのかぐらいは知つておきたいんです。教えてください、敵は何者で、どこにひそんでいるの？」

「この城内にいます。…………ですがそれを知つてしまったら、あなたは普通にふるまえなくなつて、敵に悟られてしまふでしょう。そうなれば危険が増す。今は知らないほうがいい」

ノエルはぞつとした。城内にいて、彼女を害する恐れのある者。身内や使用人はそれに当たらない。となれば、ローランド王につき従つてきた誰か、もしくはウイリアム自身……？ まさか。ウイリアムはとても良い人だつたし、そんなはずはない。

「あなたは余計なことを考えてはならない。私を信用してお任せください。必ずあなたにとつて良い方向へと、状況を変えてみせる」

「ど、どうしてそこまでしてくださるんですか？ 私が『偉大な魔女』だから？ ……でも相変わらず私は魔術でスプーンすら持ち上げられません。私があなたの主だというのは、何かの間違いではないんですか？」

誰にも言えなかつた苦しい思いを、ノエルは訴えていた。皆が魔女としてのノエルに過大な期待をよせ、そして失望していった。イーレンもいすれはそうなるだろう。ここまでして守ってくれている

彼までが。そう思つと、たえがたい気分に襲われたのだ。

「だから先ほど申し上げたんですよ。あなたは考えすぎてて、本領発揮できでないと」

嘆息しつつ、イーレンは言つ。

「本領発揮といつても、私にはもともと能力がないから、発揮できるものなんてありません！」

半ばやけ氣味にノエルが言つと、彼は思いがけない答えを返してきた。

「その通り。あなたはたとえ、これから百年懸命に努力したとしても、満足に魔術を使えるようにはならないでしょう。なぜならあなたは、空っぽになるよう生まれついているから」

「空っぽ……というのは、頭の中身がということだろうか？　そう思われていたことにショックを受けて、ノエルは黙りこんだ。

イーレンはつづけた。

「そう落ちこむことはない。私が言いたいのは、あなたは小手先の魔術を駆使するよう生まれついてはいないということ。あなたは『偉大な魔女』、つまり『陰陽の魔女』だ。世界の陰陽を調和させるために生まれてきたのだから、魔術など覚えても邪魔になるだけ」

「『インヤンの魔女』？　インヤンって何でしようか？」

「陰陽というのは、この世界に流れるふたつの<sup>エネルギー</sup>のことです。すべてのものは、この見えない陰陽に支配されている。いにしえから世界中の人々はそれを知つていて、陰陽の氣操る者を敬つていた。……だが時代が下るにつれて、陰陽を操れる者が少なくなってきた。たとえばこの地でも、古代の魔女たちはふたつのエネルギーを敬い、調和させるすべを知つていた。それが滅んで、今は小手先の魔術を駆使する者が、魔女だなどと名乗つている。そして世界中が、このような状況になりつつあるのです。だから『天』は——あなたたちの言葉で言うところの『神』は、その陰陽を調和させるあなたという存在を、この世に生み出したんですよ」

ノエルは驚き、混乱した。イーレンの言つことどがさっぱり分から

ない。ふたつのエネルギー、陰陽。そんなもののこととは聞いたことがないし、古代の魔女がそれを操っていたことなど、書物にすら残っていない。

「……信じられないでいるようですね。だがこれは事実だ。だからあなたさえ私の言葉を信じてくれたなら、明日の魔術槍試合で勝つこともたやすい」

「ほ、本当ですか？！」

混乱しつつも、ノエルはその言葉に飛びついた。勝てなくともいいのだ、せめてウイリアムに怪我をさせるような失敗さえ犯さなければ。

袖にしげみついて見上げるノエルに、イーレンは苦笑をもらした。「もちろん、私は嘘などつきません。いいですか、あなたには生まれつき、必要なものはすべて備わっているんです。ただ余計な知識を植えつけられたせいで、偉大な本質が芽生えるのをさまたげられてしまっている。明日の魔術槍試合では、魔術のことなど忘れてしまいなさい。ただ、陰陽の気を意識するんだ。世界にはふたつのエネルギーが流れていって、それをあなたは感知し操ることができる。その気になりさえすれば」

それだけを告げると、そっとノエルの手をほどいてから、イーレンは指を鳴らした。羽音がして、小鳥がテラスから飛びこんでくる。妖精の宮殿で見た、あの灰色の小鳥だった。

「これからはココが、あなたのそばについている。何かあつたら、これを通じて私に連絡してください」

「ココ」という名のその小鳥を、イーレンはノエルの肩先にとめた。そして身をひるがえし、テラスのほうへと去っていく。

「ま、待ってください！ そっちからは下には降りられません！」

あわてたノエルが追いかけると。すでにテラスに彼の姿はなく、黒い影が飛びすさり、向かいの塔の胸壁へと降り立つのが見えた。（人間ではないと思っていたけど……の方の正体はいったい何なの？）

彼の姿が夜闇に消えていくのを、呆然としながらノエルは見送った。

「チイ、と耳元で鳴き声がしたことで、ノエルは口々といつ小鳥の存在を思い出した。

「イーレンさまは、明日はまだ陰陽を意識すればいいって言ってたけど。いつたいどうすればいいの？ それにあの方は何者なの？……あなたに口がきけたらいいのに」

口々の小さな体をそつとなでつつ、ノエルは呟いた。

翌朝は、呪わしいほどに快晴だつた。天候が悪ければ魔術槍試合が中止になる可能性もあつただけに、ノエルはがつかりした。

試合場となる広場は、城下街の外にある。地面は平坦にならされ整地されており、石ひとつない。周囲には木の柵がめぐらされ、見物に来た民衆が、それに張りつくようにして試合開始を待つていた。まるで祭り日のように、焼きリンゴやミートパイ、エール酒の売り子が声をはりあげ売り歩いている。

広場内には続々と騎士団が集まり、それぞれのテントを設けて準備にとりかかっている。色とりどりの派手なテントの入口には、各氏族の紋章入りの旗が立てられていた。ハイランドの名家はほとんど、この晴れがましい行事に参加しているようだ。

王家の観覧席は、広場を見渡せるよう設けられた木組みの台上にある。そこではアンガス王と、この試合に参加しない貴族らが席について見守っていた。

ウェイリアムのテントの前でその準備を見ていたノエルは、観覧席の父王を安心させようと、軽く手をふった。実際、ウェイリアムの馬も武具も騎士団もすばらしく、ノエルの魔術がまつとうだつたなら勝ちはゆるぎなかつたろう。

「レディ・ノエル。こちらはほぼ、万全の支度がととのつたんですねが、ひとつだけ足りないものがあるんです」

鉄の鎧をつけ終えたウェイリアムが、テントの内から出てきて言った。ノエルは見当もつかず、目をぱちくりさせてウェイリアムを見上げた。と、ウェイリアムはノエルの手を慇懃にとり、その手袋のレースに触れた。

「これです。戦士は敬愛する貴婦人の贈り物を身につけてこそ、勝てるもの。この手袋をいただくわけにはまいりませんか？ 形式的なものですから、どんなものでもいいんですが」

ノエルは真っ赤になつた。女性の持ち物を与えるのは、ハイランドでは恋人同士の間で行われるもの。だが今のウェイリアムの口調からすると、ローランドではそれほど親密な行為ではないらしい。ノ

エルはすぐに手袋をぬきとつて、ウェイリアムに与えた。

「 ウェイリアムさま。よろしければ、わたくしの手袋もお持ちになつてくださいまし！ わたくし、ウェイリアムさまが勝たれるよう祈つておりますわ！」

「 まあ、ずるい！ それでは私のもお持ちになつて、ウェイリアムさまつ」

いつのまに集まつてきたのか、ハイランドの貴族の娘たちがウェイリアムとノエルをとり囲んでいた。どうやら皆、黄金の髪に青い目の美神のごときウェイリアムに夢中のようだ。少し前まで敵対する隣国の王として恐れていた相手だというのに、大した変わりようである。だが気さくでユーモアあふれるウェイリアムの人柄が、警戒心をこつも早くに解かせてしまつたのだろう。

「 レディの申し出を断るのは心苦しいのですが。馬上槍試合で戦うものは、たつた一人の貴婦人に忠誠を尽くすものです。せっかくですが、今回はレディ・ノエルのものだけをいただきます」

ウェイリアムのあざやかな断り文句に、皆の注目がノエルに集まつた。貴族の娘らの、嫉妬と羨望の入り混じつた視線はたえがたく、ノエルはその場を逃げだしたくなつた。

そのとき、近くにいたティアドラがこちらを見ているのに気がついた。見ている、というよりまるで、睨みつけているかのようだ。他でもない、ノエルのことを。まるで憎んでいるかのように。

もしかして、自分がウェイリアムと親密にしているように、ティアドラには見えているのだろうか？ だとしたらすぐに、誤解されないようウェイリアムとは距離をおかなければ。

「 レディ・ノエル。何か、気になることでも？」

あらぬほうを見て立ちつくす彼女を奇妙に思つたらしいウェイリアムが、声をかけてくる。

「い、いえ、別に何も」

ノエルがウイリアムに返事をして気がそれたすきに、ディアドラはおのれの味方のテントへと消えていた。

（……試合では味方だから、ウイリアムをまと親しくさせていただけなのに。まあこの試合が終われば、ディの誤解も解けるわね）

それからまもなく、あたりに高らかなラッパの音が鳴り響いた。魔術槍試合大会の、開幕の知らせだ。

出場する騎士団が、それぞれの紋章入りの旗をかかげた従者を先頭に、会場内を柵ぞいに一周する。美々しい甲冑に身をつつみ、飾りたてられた馬に乗った騎士たちに、観衆らは惜しみない歓声を送つた。

披露目をする騎士団には、それぞれ魔女がいる。皆、城下の魔術修道院の修道女ばかりで、おのれの出身氏族の騎士団と組んでいた。例外は最強氏族を選んだティアドラと、そしてウイリアムに頼まれ断れなかつたノエルのみ。

魔女は騎士団の最後尾に馬をつけて、皆の注目を浴びた。中でもひときわ大きな歓呼の声で迎えられたのはティアドラだ。彼女が騎士団とともに貴賓席の前で止まり、頭を下げて礼をとると、民衆席からは拍手が起つた。ノエルのときにはそのようなことはなく、ティアドラの圧倒的な人気は誰の目にも明らかだつた。

まもなく試合が始まった。トーナメント形式だが、ノエルとディアドラの騎士団が特別扱いされることではなく、一回戦目からの出場となる。

氣をしづめようとウイリアムのテントでひとり、神への祈りに没頭していたノエルは、何かが肩にとまる気配を感じた。

「まあ、ココ！ どうして部屋にいなかつたの？ 危ないのよ、この場所は！」

ノエルの小言をものともせず、ココはくまほじで羽づくろいに没頭している。

「しょうがない子ね。試合中は、私のマントの中隠れてるのよ、分かった？」

チチッと返事らしきものをする口々を見ながら、ノエルはイーレンの言葉を思い出していた。

（魔術のことなど忘れて、陰陽の氣を意識する……世界に流れるふたつのエネルギーを感じ操る）

よく分からない。でもあの人が嘘をつくはずがない。城門でノエルを救つてくれた、命の恩人なのだから。ノエルは何度も心の中で、イーレンの言葉を何度もくり返した。一回戦目にのぞむため馬に乗り、ウイリアムとともに待機場へと向かっても、それはつづいた。

「陰陽の氣、世界に流れるふたつのエネルギー……魔術は忘れる……」

「レディ・ノエル、大丈夫ですか？ 先ほどから何かつぶやいておられるようですが。そろそろ始まりますよ？」

ウィリアムにうながされ、ノエルは我に返った。

試合が始まろうとしている。会場へのゲートが開き、興奮する馬を御しながら騎士団らが、入場しようとしているところだった。

ノエルは騎士団のしんがりについて進んだ。ローランド王家の獅子の紋章旗がたなびき、そして騎士らの鋼の甲冑が誇らしく陽光をはじいている。観衆らのどよめきが、どうつゝと地をゆるがした。

魔術槍試合は、ハイランドならではの催しである。他の土地には魔女がないからだ。だが魔術を用いるほかは、他国での馬上槍試合のやり方とほぼ同じだった。

まずその試合場は横長の長方形に作られている。中央を見下ろす高座にある観覧席に、王侯貴族が着席している。たいていは王が、観覧席からハンカチを落として試合開始の合図とするとなつていた。

開始とともに両翼の騎士団が走りはじめ、激突する。互いの武器は槍であり、それで相手を突きたおす。転ばずに馬上に残つていられた方の勝ちであり、引き分けならもう一度激突するのだ。

魔術槍試合では、さらにこの激突時に、魔術での攻防が加わる。小さな雷や炎などの衝撃波で敵をひるませると同時に、魔術結界で味方の騎士を守るのだ。魔女は騎士団のしんがりにつくけれども、下手をすると戦闘にまきこまれて怪我することもある。なかなかに危険な試合なのだつた。

「こちら獅子の紋章をいただきますのは、いにしえの獅子王のやんごとなき血筋を誇るローランドの名家出身のウィリアムどの……」

ウィリアムの紋章官が、とうとうと試合前の口上を述べたてる。騎士はおのれの紋章のため誇りをかけて戦う。なので必ず試合前に

は、紋章官がその紋章と騎士の血筋とを、観衆らに説明するのだ。

両騎士団の名乗りは、まもなく終わった。

ノエルたちの一回戦目の敵は、武勇の誉れも高いマクリーン氏族だった。彼らにつく魔女は、ノエルより少し年長の魔術修道女であるリリアナだ。赤毛の美少女で気性が激しく、とろくさいノエルを常に見下しているようなところがあった。今も、はなからノエルの能力を問題にしていないようで、試合中だといつに騎士の一人といちゃついている。

(リリアナはたしか音魔法が得意なのよね。それだと騎士たちの甲冑や武器が狙われるわ。かぶとや剣がわんわん鳴り出したら、ウィリアムさまたちは苦労されるでしょう。音魔法への防御はたしか、音を伝える空気を支配するしかないのよね。ええと、空気魔法の呪文はたしか……)

父王が観覧席の上から、開始のハンカチを落とそうとしている。ノエルはそれを見やりつつ、必死で記憶をたどっていた。リリアナたちが最初の敵だと知ったのは、ぐじ引きが行われた数十分前のこと。そのときから呪文を思いだそうとしているのだが、どうも完璧ではない気がする。

(どうしよう、間違えたらウイリアムさまたちに迷惑がかかるわ。落馬でもさせようものなら、外交問題にもなりかねないし) 焦つても呪文は出てこない。ノエルはおのれの鈍い頭脳を恨んだ。そのとき、チチッと聞きなれた鳴き声が、彼女のマンツのフードから響いてきた。灰色の小鳥——ココが、隠れていたフードから出てきてノエルの肩にとまり、その金髪の房をひっぱる。

「ココ、だめよ。今はそんな遊んでる場合じゃないの……！」

小声でさとすうち、ノエルは気がついた。ココは彼女に、イーレンの言葉を思い出させようとしているのかもしれない、と。

(イーレンさまは、魔術を忘れると言つてたわ。つい魔術のことばかり考えてしまったけど……ああでも、陰陽を意識するつて、どうすればいいの？)

悩むうち、王の手内のハンカチが落とされた。試合開始のラッパが鳴る。観衆らのどよめきが、どうと地をゆるがす。

ウイリアムたちの馬が、一斉に走り出した。向こうの敵も、土煙をあげてせまつてくる。一瞬遅れて、ノエルも馬を走らせた。敵の最高尾につく魔女リリアナが、音魔法をしかけてくる。ウイリアムたちの鉄の盾や鎧、そして剣がうなりをあげはじめ、皆が疾走する馬上できくりとしたのをノエルは見た。このままではウイリアムたちが、体勢を崩してしまう！

その危惧は的中した。驚きで浮き足だつたウイリアムの騎士団は、敵の槍にすくいとられて落馬しかけた。が、かるうじてふみじどまり、試合結果は引き分けとなつた。すぐに再試合が行われる。

（空気魔法はどうしても無理のようだし……こいつなつたら、陰陽の魔術をやるしかないわ。陰陽。インヤン。ふたつのエネルギー……）

心の中で、イーレンの言葉を反すうする。

せつぱつまつた状況で集中したせいか、ノエルには雑念がなくなつていた。無心に、イーレンの言葉をくり返す。

と、「魔女の石」を種に変化させたときの、あの感覚が戻つてきた。

ノエルの中に波のさざめきが生まれる。よせては引きをくり返し、さらに大きな波となつて体中をめぐりはじめる。より集中すると、その波は体の中心あたりから生まれているように思えた。そして波はふたつのエネルギーをまとい、体中を血液のように循環する。

陰陽。ふたつのエネルギー。ノエルの体から生まれたその陰陽の波が、外へと飛び出す。

「じゅ、と風のうなり声がした。ココがあわてて、ノエルのفردへと逃げこむ気配がする。

開始の合図のハンカチが落ちて、両者の馬が疾走しあじめた。ふたたび、ウイリアムらの鉄の甲冑や剣が、わんわんと唸りをあげようとしていた、が。

ノエルの体から生まれ出た風が、それらの音を呑みこみ、敵方へ

と押し寄せていく。とたん、悲鳴をあげて馬上につつぱすリリアナの姿が見えた。

ぐわん！ と両者の槍と盾とが激突する音が轟いた。つづいて、どうつと地面に重いものが倒れる音。勢いあまってしばし駆けた馬をようやく止めて、ノエルがふり返ると。地面に落ちていたのは、敵方の騎士団ばかりだった。ウィリアムの騎士団は無傷だ。勝利を手にした瞬間だつた。

「レティ・ノエル、すべてはあなたのおかげです！　あなたはすばらしい魔女だ！」

一回戦を勝ちぬいてテントへ戻ったウイリアムや他の騎士たちは、口々に感謝の言葉を伝えてきた。試合場で勝者があからさまに喜ぶのは、良識に反する。互いの健闘をたたえてこそその騎士なので、勝利の喜びはテントへ戻つてからということになるのだ。

「いいえ、とんでもありません！　リリアナが　対戦相手の魔女が、魔術を失敗しただけのことですわ。私は防御や攻撃の魔術を用いてませんし。だから魔術なしの槍試合でここまで勝てたのは、純粋に皆さんのお力ですわ！　私の力じゃありません」

ノエルは必死でそう言つたが、ウイリアムたちは彼女が謙遜しているだけと受けとつたようだ。

さきほど、リリアナは急に魔術を使えなくなつてしまつたように見えた。その後はぐつたりと疲れはてて眠つてしまい、何が起つたのか聞き出すこともできなかつた。

（私、もしかしてイーレンさまのいう陰陽のエネルギーを、操ることができるのかしら……？　イーレンさまがここにいらっしゃれば、聞くことができるのに）

ノエルは困惑しつつも、つづく試合に続投し、勝ちをおさめていった。そのどれもが、魔女たちが途中で魔術を失い、最後には気を失うというパターンで終わつた。ノエルはその間、ひたすら陰陽エネルギーのことを意識していただけだ。

さすがにここまでくると、観衆らも何かが変だと気づきはじめたようだ。

ノエルは何も魔術を用いてないのに、敵方の魔女が急に魔術を使えなくなる。そして純粋に互いの槍試合の強弱のみで決着がつく。まるでノエルとウイリアムに遠慮して、敵方が遠慮しているように、

観衆らの目には映つた。

そして決勝戦の相手は、予想通りディアドラたちとなつた。試合場で、両者が所定の位置につき、試合開始の合図を待つ。

八百長でノエルとウイリアムが勝利してきたと思いつこんだ観衆らは、自然、ディアドラたちを応援する。試合場にとどろく応援は、どれもがディアドラたちに向けられたものだった。

ノエルが恐る恐る貴賓席を見上げると、父王と魔術修道院長が、心配げな表情を浮かべている。観衆の敵意がノエルに向けられていることを、憂慮しているのだろう。

(あれは……あの人は……！)

そしてノエルは、観衆席に黒いフードを目深にかぶつた、すらりとした人影を見いだした。顔こそ見えないけれども、あれはイーレンだ。間違いない。試合を観に来てくれたのだ。目をこらすとその隣に、あの巨体のヤドリギ妖精ジョイミーの姿も見える。

(イーレンさまに叱られないよう、しつかりやらなきや。もっと集中して、陰陽のエネルギーを操れるようにしてみよ。ここまで勝てたのが陰陽の力なのかどうかは分からぬけど、それが作用していることは間違ひなさそうだし)

ノエルは馬上で、体に生まれる波に集中した。これがきっと、陰陽エネルギーに関係するものなのだ。

そしてついに王のハンカチが落ちて、試合が始まった。

ディアドラは雷魔術を得意としている。彼女が呪文を唱えはじめ、その身のまわりにぱちぱちと火花のようなものが飛んだ。彼女の雷の威力は強大で、せんだけて城へ押しよせてきた悪霊たちを、一斉になぎはらつたほどである。

(……でも、ディの能力を恐れていてもはじまらないわ。私は私。できることだけを考えよう。今は陰陽のエネルギーのことだけを)

ノエルは集中した。外界のほとんどのことを忘れて去るほどに。

そうするうちに、周囲の陰陽の流れが感じとれるようになつていた。ディアドラはオガム語の呪文で、雷を呼び出しており、そのせい

で周囲の陰陽は乱れてしまつていて——ノエルはそれを、正すだけ  
でいいのだ。それで「ディアドラの魔術を破ることができる。

またもノエルの体内から、あの不思議な波が生じた。陰陽一いつの  
エネルギーが体中をめぐり、そして外へと飛び出す。

そのとき。

どうつ、と何かがぶつかるような衝撃音がとどろいた。

ノエルは我に返った。

いつのまにか槍試合の決着がつき、ノエルたちの騎士団は試合場  
の端までたどりついていた。ふり返ると、敵の騎士団のほとんどが  
落馬し、地面に転がつてしまつてゐる。わきばどの衝撃音は、彼ら  
が地面にぶつかつたときのものなのだ。

ディアドラはかるうじて馬上にあり、落ちた騎士団のそばで呆然  
としているようだった。

まぎれもなくノエルたちの勝利だった。

だが、あたりは不気味に静まりかえつてゐる。

審判がウイリアム騎士団の優勝を高らかに宣言するや、観衆席か  
らは非難めいた叫びがもれた。明らかに、この試合結果に不満な  
だ。

八百長。そう観衆らは誤解したに違いない。ウイリアムとノエル  
のために、わざとディアドラたちは勝ちを譲つてやつたのだらう、  
と。

両騎士団が試合場を退いてもなお、観衆らの不満げなざわめきは  
やまなかつた。

アンガス王が、ウイリアムの騎士団に優勝者の杯を与える。栄誉  
の瞬間のはずだが、周囲からはまばらな拍手しか聞こえてこない。  
あたりには、声にならない怒りと鬱憤がうづまいている。

そんな中、勝利の喜びを感じることなく、ノエルはウイリアムら  
ともども試合場を後にしたのだった。

ところが自室へ戻つてもなお、ノエルは心安まらなかつた。

「ノエルさま、あ、あの宝石箱が、大変なことに……！」

自室へ足をふみ入れるなり、あわてふためいた侍女に泣きつかれてしまつたのだ。

侍女が指さす先、ベッドのそばの小テーブルに乗つた箱が、かたかたと振動していた。まるで中に小動物でも入つているかのようだ。

それは「魔女の種」が入つた箱だつた。

驚愕したノエルが箱にどびついて、震える手で押さえつづ鍵を開けると。

「きやつ！」

ぽん、と耐えかねたように何かが、飛び出してきた。その衝撃で、ノエルは思わず尻餅をついてしまつた。

チチッとさえずりつつ、ノエルの肩にとまつっていたココがばばたき、その飛び出した何かのそばにとまる。

それは、よくよく見ると大きな植物の芽だつた。魔女の種が発芽したもの、小さな宝石箱におさまらず、振動していたというわけだ。

(そ、そういうえばイーレンさまは、これが何かの木の種だつておっしゃつてたわ。でも水もあげてないのに、いきなり芽が出たつて、どういうこと?)

かけよつてきた侍女に助け起されつゝ、ノエルは発芽した種と嬉しげにさえずるココとを、じつと見つめた。

(イーレンさまは、しばらくこの城内に身を隠すと仰つてたわ。そういえば、魔術槍試合でもちらつとお見かけしたし。彼を探し出して、このことを伝えないといけないわね。このままじゃ、何が起こるか分からぬもの)

明日は夕方から仮面舞踏会が開かれる予定だが、それまでは昼の会食をのぞけばフリーとなる。その間にあの不思議な老人を探し出そうと、ノエルは決心していた。誰かにともに探してもらえば、話は早い。だがノエルはしばらく、妖精の宮殿へ行つたことやこの「魔女の種」のこと、そしてイーレンのことなどを秘密にしておこうと思つた。よけいなことで父王やティアドラや魔術修道院長を、心

配させたくなかったからだ。

(それにイーレンさまは、私に災いが近づこうとおっしゃつてた  
わ。そのことも、もつとくわしく聞かなきや。場合によつては、お  
父さまや「ティにも相談しなきやならないし）

問題山積だつた。

あまりにも考えるべきことが多すぎたせいで、ノルはもはや、  
魔術槍試合で理不尽な目にあつたことなど、すっかり忘れてしまつ  
ていた。

「ねえ、ココ。イーレンさまは城内にはいないんじゃないの？ あんな目立つ人がそうそう人波にまぎれこめるとは思えないし。東方風の衣装の人なんて、ここには他にいないんだから」

肩にとまる小鳥に尋ねても、ふいとそっぽを向かれてします。

「もう、ちゃんと協力して！『魔女の種』をあのままにしておけないでしょ？！」

ノエルが少し声をあらげると、ちよづどかたわらをよぎりうとしていたカップルが、不審げにこちらへを視線をよこす。奇妙な独り言だと思われたらしい。

（仮面があつてよかつたわ。私が気狂いになつたなんて思われて、変な噂を流されたくないもの）

顔の上半分を覆う、羽飾りのついたベルベットの仮面の位置をおしながら、ノエルはほつとしていた。

彼女は中庭に出ていた。華やかな装いの貴族らが行きかう中、邪魔にならないよう隅の木陰で一休みしていたのだった。

昨日の荒々しい魔術槍試合とはうつてかわって、今宵このエイデンヴァランド城では仮面舞踏会が催されていた。

広い中庭ではかがり火が焚かれ、楽しげな楽の音が奏でられて、人々がダンスに興じている。大広間での古式ゆかしい宫廷舞踊とは異なり、野外ではややくだけた軽やかなダンスが行われていた。

朝から舞踏会の準備に追われていたノエルは、暇になるやイーレンを探しまわっていたのだが、いまだ見つけ出せずにいたのである。ココは役に立つつもりはないらしく、ノエルに何を言われようとどこ吹く風で、羽づくりに夢中だ。

途方にくれたノエルが、中庭のダンスを見るともなく見ていると。「どうして踊らないんですか？ レディ・ノエル」

こきなり背後から声をかけられて、彼女はびくりと震えた。仮面

で顔の上半分を隠していても、分かる人には分かつてしまふものだ。ふり返るとそこには、仮面を外した金髪の貴公子 ウィリアムが立っていた。いかにも王者らしい優雅な金繡のガウンにマントをまとっている。田舎者と馬鹿にされているハイランド人と違い、口一ランド人はヨーラ大陸からの流行をとりいれるのが上手いと言われている。

それに対しても、ノエルはいかにも田舎の王女といった装いである。おおげさな襟かざりや重たげな袖飾りなどのついた、古めかしいデザインのドレス。しかも、金糸で薔薇の刺繡がほどこされているもの、暗めのえんじ色の布地でできており全体的に地味だった。

だがノエルが目の前のダンスに加われるのは、野暮つたいドレスのせいではない。イーレンを探しているといつもあるが、もうひとつやむをえない理由があつた。

「ウイリアムさま……お恥ずかしい話ですけど、私、踊れないんです」

田をつぶつて己の恥を告白したノエルは、顔がかつと熱くなるのを感じた。きっとウイリアムは、呆れた表情を浮かべているだろう。ダンスが踊れない王族など、この世に存在していいはずはないのだから。

「そういうことでしたか。でもあなたが言うのは、そもそもダンスがワンステップも踊れないんじゃなくて、たんに上手く踊れないということでしょう？」

ウィリアムの言つ通りだつた。ノエルは不器用で、すぐにパートナーの足をふんづけたり踊りの列を乱してしまつたりするのが悩みだつた。それさえなければ、ノエルとてダンスを旨と楽しみたかったのだ。

ウィリアムは少年めいた笑みを浮かべて、快活に言つた。

「だったら、気に病むことはありませんよ。昨日の魔術槍試合で、僕たちの息がぴったり合つことは証明されたじやありませんか。ダンスだつて、僕と一緒にならうまくいきます」

なれば無理やり手をひかれ、ノエルはダンスの列に加わった。中庭での陽気なダンスは庶民的なもので、動きは激しいもののステップはそう難しくない。しかもほぼパートナーと共に動くので、ウイリアムのみちびきで、そう間違えずに済んだ。

ノエルはいつのまにか、声をあげて笑っていた。気どつた宫廷舞踊ではありえないことだった。

「レディ・ノエル、踊りが下手だなんて嘘でしょう？　どうしてそう、あなたは謙遜してばかりなんでしょうね。魔術だってとてつもない才能をお持ちなのに」

ウイリアムに言われ、ノエルは困惑した。

昨日の魔術槍試合は、なぜ勝てたのかいまだに分からずにはいるのだ。どういうわけか相手の魔女が、魔術を駆使できなくなるという事態に陥つただけのこと。この日ノエルは、暇を見つけては対戦相手だつた魔術修道女らをつかまえ、あの時のこと尋ねていた。ある者は首をかしげて原因不明だといい、ある者は負けを蒸し返されて不機嫌になり、そっぽを向くだけ。解明の糸口をつかむことはできなかつた。

これに答えられるのはやはり、あの不思議な老人、イーレンだけだろう。

だからウイリアムにほめられるのは、具合が悪い。そこでノエルは正直に打ち明けることにした。

「ウイリアムさま、実を言うと私にもわけが分からんのです。私は落ちこぼれ魔女で、あの試合でも魔術はこれっぽっちも使えません。だからそういうふうに褒められても、困つてしまます」

「魔術を使ってない？　ではなぜ僕たちは勝てたんですか？　敵方の魔女は皆、急に魔術を使えなくなつたように見えた。あれはあなたのことしたことではないんですか？」

「そのことは　私にもよく、説明できません」

「そうとしかノエルには言えなかつた。

ウイリアムは不思議そうにノエルを見つめていたが、やがてこつ

くつとうなずいた。

「あなたは僕の予想とはずいぶん違っていたな。とても素直で正直なのに、どこか謎めいている。……でも、あなたといふととても楽しいし安心できます。今、僕が何を考えているか、お分かりですか？」

謎かけるように問われ、ノエルは困惑して首をふった。ウイリアムはしばらくこちらを凝視していたが、やがて表情を改めた。  
「もうこのことはいいでしょう。それよりもまた、ダンスを踊りませんか？　一曲踊つたら、ビールもますます美味しくなるでしょうし」

ウイリアムに誘われ、ノエルはうなずいた。

「ありがとうございます、ウイリアムさま。さつきの踊りは、とても楽しかったわ。子供のとき以来です。だつて大人になると、淑女らしく優雅に踊らなきゃならないんだもの」

「こり笑みつつ伝えると、ウイリアムも嬉しげな表情を浮かべた。うちとけた空気が、二人の間に流れる。

「……そうね、でもあなたは一度だって、淑女らしく優雅に踊れたためにはなかつたわよ、ノエル。ウイリアムさま、今度は私と踊つていただけません？」

「ディ、あなたも外に出てたのね！」

いつのまにかディアドラが、一人のかたわらに立つていた。  
ノエルがウイリアムと二人きりで楽しんでいたことが気に入らないらしく、きついまなざしでこちらをにらんでくる。

「レディ・ディアドラ。もちろんですよ」

ウイリアムは丁重に、ディアドラの誘いに応じた。一瞬、すまな  
そうなまなざしをノエルに向けてくる。

ノエルは微笑み、ウイリアムとディアドラを気持ちよく送り出してやつた。

ダンスは楽しかつたが、このままだとイーレンを探しに行けなくなると、ひそかに危惧してもらつたのだった。ディアドラの横やりは、

むしろよい機会だと思つたぐらいである。

それにしても、とノエルは思う。

( ウィリアムさまの花嫁候補とはいっても、私はおまけみたいなものだし。本命はディアドラに決まつてゐんだから、あんなに怒らなくていいのに…… )

ため息をひとつつき、ノエルがその場を去ろうとすると。

「まあ、ごらんになつて！ ディアドラさまのお衣装は、ヨーラ大陸渡りの職人が仕立てたものに違ひないわ。あのボディスのレース飾りの見事なこと！」

「そうねえ、洗練されたウィリアムさまのお姿と、とつてもお似合いだわ！ 田舎っぽい格好のパートナージャ、ウィリアムさまが可哀想だもの」

ノエルにあてつけるかのように、ディアドラのとりまきの貴婦人らが、聞こえよがしな会話を交わしあじめた。

「あのお二人なら、絵のように美しいご夫婦となるでしおうねえ。……本当に、ウィリアムさまは優しすぎるのが惜しいところですわ。早くティアドラさまと踊りたかったでしょうに、他の方におつき合いなさつたりして」

さすがのノエルもこれにはむつとして、何か言い返したくなつたが。

「ねえ、ご覽になつて！ あの吟遊詩人、ディアドラさまを陰から見守つてるわよ！ あの噂、本当だつたのかしら？」

「噂？ ……ああ、もしかして吟遊詩人がディアドラさまにかなわぬ恋をしてて、つきまとつてゐるつていう、あれ？」

貴婦人らが中庭の隅にいる男を見つけだし、騒ぎたてはじめたので、ノエルは気になつてしまつた。

その噂の主の吟遊詩人は、ノエルも見たことがあつた。

赤毛で頬に傷のある大男。彼は、ひとめ見れば忘れがたい容姿をしていた。たしか、悪靈の船団がこの城を襲つ前に、城内で弾き語りをして民衆をなぐさめていたのを、ノエルも目にしている。

その男は深いまなざしで、踊るティアドラたちを見つめている。たしかに意味深な態度だった。

「ねえ、噂だとあの吟遊詩人、ティアドラさまのお部屋に出入りしてるらしいわよ。もしかしたら一人は秘密の恋人同士じゃないかって……」

「しつ！ 馬鹿ね、やめなさいよ」

貴婦人たちには、そばにノエルがいたのを思い出し、噂話を中断する。

ノエルはその言葉にぎょっとなったが、単なる噂話のことだとして、聞かなかつたふりをした。

（すごい噂が流れてるらしいけど……でもティマに決まってるわ。あのディイが、そんな軽率な真似をするはずないもの）

ノエルが見ている前で、吟遊詩人はその場を離れ、どこかへ行ってしまった。

中庭の中央では、ティアドラがウイリアムと今もなお、楽しげにダンスに興じている。

何か奇妙な感覚を覚えつつ、ノエルはその場を後にして、イーレンを探しはじめたのだった。

「よお爺さん、久しぶり。あんた、俺たちと一緒に船に乗つてただろ? しばらく姿を見なかつたな」

外庭ですれ違いざまにそう声をかけられ、翼任はちらりと相手に目をやつた。

頬傷のある、赤毛の大柄な吟遊詩人。そう、たしかに彼は、翼任がこの島へ来るときに、船で乗り合わせた相手だ。

「爺さん、とぼけるなよ。フードで顔を隠しても、あんただと分かるぜ。その独特な香りでな。いつたいどこの香水を使つてるんだ?」

リース。そう、この吟遊詩人はたしかそういう名前だ。ここ数日、彼はあの食わせ者のしもべとして、いやらしい陰謀に加担していたようだつた。翼任にとつての、いまいましい敵の一人である。

「この男に正体を悟られてはならない。翼任はわざと、気分を害したような声音で返した。

「失礼だが、人違いをしてるようだな、吟遊詩人どの。この私が老人に見えると?」

ばさりとフードをおろして顔をさらすと、リースは一瞬、ぎょっとしたようだつた。が、すぐに氣をとりなおしたらしく、彼は詫びの言葉を口にした。

「たしかに人違ひのようだ。悪かつたな、爺さん扱いして。その香水も東方の衣装も、知人に似ていたから」

これは体臭消しの香水なんかじゃない、一緒にするな。と心の中で毒づきつつ、翼任はふたたびフードで顔を隠す。

歩き出してからしばらくは、吟遊詩人の視線が背中にはりついているのを感じた。どうやらこちらを怪しんでいるようだ。なかなかカンの鋭い男らしい。

(……あの男にも、注意する必要があるな。一筋縄ではいかない相

手だ）

この夜、翼任はこの城全体に、ひそやかな緊張を感じとつていた。そこで外城から中までを見回ってきたのだが、そこには「敵」のしもべである悪鬼　この国の言葉でいうと「ティアウル」が、潜んでいるのを発見したのだつた。「敵」はもしかしたら、今夜中にノエルたちを始末するつもりなのかもしれない。

今、ノエルのことは妖精たちにひそかに守らせているが。この状況では自分がついていなくてはならないと、翼任は急ぎ跳ね橋を渡り、主塔へと戻ってきた。

仮面舞踏会が催されている今宵は、一度城門に入つてしまえばさほど見咎められずにあちこち出入りできるので、好都合だつた。翼任が主塔の建物へと戻り、ノエルの私室へ向かつと、廊下のすみで、乱れた気配を察知した。

「くそっ！　この生意氣なティアウルがつ！　この俺様に敵つとも思つてたのか？！」

ヤドリギ妖精のジェイミーだった。異様な姿の黒っぽい生き物をおさえつけ、いきまいている。それはとがつた耳に槍のような尻尾、そして山羊のような角の生えた奇妙な生き物　ティアウルだつた。「ジェイミー、人に見られたらどうする！　今のおまえらは姿を隠せていないぞ」

はつと気づいたらしいジェイミーが、あわてて姿を消す。

ティアウルは彼にさんざんに打ちのめされ、脅えたようにうずくまり震えていた。「敵」の操る悪鬼とはいえ、その姿に哀れみをおぼえた翼任は、そつとティアウルの首筋に手をやり、気絶させた。「もうこれに乱暴するな。しばらくは田も覚まさないだろ？から。それよりジェイミー、レティ・ノエルはどう？」

ジェイミーは一瞬ぽかんとし、やがてあわてたような表情を浮かべた。

「忘れてた……でもこのティアウルの野郎が襲つてくるまでは、あんたの言いつけどおりちゃんと見張つてたんだぜ。レティ・ノエル

はあんたを探してゐみたいで、たぶん今もあつちこつちうりちゅうしてゐる。どうやら『魔女の種』が発芽したこと、あわてるらしい。なあ、そのことを早くあの子に説明してやつたほうがよくなのか？」

「『魔女の種』が発芽したのは、レディ・ノエルの能力が目覚めたせいだ。このことを告げたら、ますます混乱させてしまう気がする。それに彼女の能力の開花の影響を受けたのは、『魔女の種』だけじゃない。城内の魔女らもそして「敵」も、使える魔術が限られてきてるはず。……そしてこの私も」

ばさりと翼任がフードをおろすと、ジョイミーはぎょっとした様子でのけぞつた。

「な、なんだよ、若返つちまつて！ そういうや声の調子が違うとは思つたんだ！ 急に若作りなんて、何考へてんだよあんた？」

「馬鹿、若作りじやない。元の姿に戻つただけだ。レディ・ノエルの膨大な力の影響で、私の術も使用不可となつた」

「え、じゃあ、あんた本当は若かつたのか！ いつたいいくつだい？」

「二十三」

さらりと答えると、ジョイミーはしばし絶句した後、不機嫌そうにうめいた。

「なんだよ、若造じやねえか！ 今までよくも偉そうに命令してくれたなあ？！ 爺さんだと思つて遠慮してやつたのによう……つて、それよりあんた、魔術が使えなくなつたつて？ どうこうとだよ。俺はなんともねえぜ？」

「魔術じやなく仙術なんだが まあ、それはいい。おまえたち妖精は、そもそも存在自体が魔法的だから、レディ・ノエルの力の影響を受けたりしないんだ。私は半分、人間の血が流れているからな。もろに影響を受けてしまつた」

「どうするんだい、あんたが魔術を使えないんじや、いざというときレディ・ノエルを守れねえじやねえか！」

「幸い今は、敵も魔術を使えなくなっている。……ただ、魔術以外の手でくるかもしれない。だからおまえたちに、レディ・ノエルとその父親をきちんと守つて欲しいんだ」

翼任の言葉に、ジョイミーは不可解といわんばかりの表情を浮かべた。

「ダンカン王まで守る必要あんのか？ レディ・ノエルのために、その父親まで守つてやるつての？ なんかあんた、とことんあの魔女っ子に呪くしてんなあ」

「……馬鹿なことを。レディ・ノエルの心が不安定になると、とてもないことが起きる。だからなるべく彼女の心が乱されなによつしてるだけだ」

「へえ、そう。ふつ~ん、なるほどねえ」

にやにやしながらこちらを見ているジョイミーに、さういちだしつとも、

翼任は相手にしないことにした。

「それよりも早く、レディ・ノエルを探しに行こう。『敵』が動き始めそうな気配がある」

「イーレン、馬鹿言つなよ。この仮面舞踏会の夜にかい？ まさかそんな……」

と、そこへ思いがけないモノが飛び込んできたせいで、ジョイミーの言葉は中断された。それは、さえない灰色の羽をもつ小鳥ノエルのそばにいたはずのココだつた。

「レディ・ノエルに何かあつたんだな？」

翼任が尋ねると、その指先にとまつた小鳥は、得たりとばかりにうなずいた。

「ならばすぐに、彼女のところへ案内しろ。」

翼任がココとともに走り出すると、ジョイミーもあわてて追つてきた。

「ココが導く先は、どうやら主塔のテラスのようだつた。王族との近侍にしか、立ち入りの許されない場所だ。  
(大事なればいいがーー)

嫌な予感がする。いつになく翼任の心には、焦りが生じていた。

「ほらよ、ノエル。私、テラスに出てこるのは  
ティアドラの私室に呼ばれたノエルは、その声にしたがいテラス  
へ出た。

そこは海ぞいの岸壁を見下ろす場所であり、せんだつての悪霊ら  
の襲撃により、胸壁のそこかしこが崩れてしまつていて、補修する  
間もなく、ウイリアムたちを迎ねばならなかつたからだ。

月明かりで辺りを見渡すことはできるものの、夜には危険な場所  
だ。ノエルは崩れた胸壁から吹きつける海風にぞつとしつつも、テ  
ィアドラに近づいた。

「ディ、もうすぐ晚餐会も始まるのに。呼び出したのはなぜ?  
「もちろん、晚餐会の前にことを済ませたからよ」

「え、なにを?」

するとティアドラは、いつもノエルの愚鈍さに呆れたときにもら  
す、あの皮肉な笑い声をあげた。

「あんたって、本当に何も分かつてないわね。……まあ、そういう  
ところが利用しやすかつたんだけど」

つぶやくティアドラの銀の髪や紫の瞳がきらきらと月光をはじい  
て、人ならぬ美しさをかもしだしている。だが妖しい笑みを浮かべ  
たその表情は、なぜだかとてもまがまがしかつた。

いつもと様子の違うティアドラに、ノエルは違和感をおぼえた。  
「いったいどうしたの、ディ? 利用つてどういうこと?」

「本当に鈍い子ね、うんざりだわ。……单刀直入に言つと、あんた  
にもう利用価値はないし、それどころか私の邪魔にさえなつてゐ  
だから消えて欲しいの」

ノエルはしばし、言葉を失つた。ティアドラの言つ意味が、さつ  
ぱり理解できない。冗談だらうと思うことにして、かすれた笑い声  
をもたらす。だがティアドラは表情を崩そうとはしない。

「そんな……邪魔つて、消えて欲しいって……何を言つてるの？」  
しだいにうろたえていくノエルを見て、ディアドラは妖しく笑つた。

「じゃあ、馬鹿でも分かるように教えてあげるわ。 ねえ、少し前に森での薬草摘みで、皇帝ダケっていう毒キノコのことを、あんたに教えてあげたのを覚えてる？」

唐突な話の飛躍に驚きつつも、ノエルはこくりとうなずいた。それは一ヶ月以上前のこと。鮮やかな色彩の皇帝ダケを、毒キノコと知らずに手にとったノエルは、ディアドラにこいつぴどく叱られたのだった。だが、なぜ今そんなことを持ち出すのだろう？

きょとんとしたノエルに、ディアドラはつづけて話した。

「あの皇帝ダケは猛毒で、口にするとすぐにのたうちまわって死んでしまう。かつてレムロム帝国に侵略されたこの地の魔女は、皇帝をこれで毒殺したわ。でもね、実は皇帝ダケよりもっと強烈な毒キノコがあるのよ。強烈で、しかもゆっくりじわじわと殺していく毒キノコ。かの魔女がそれを知っていたなら、皇帝暗殺で処刑されることもなかつたでしようね」

「ディ、何を言つてるの？ どうして今そんなことを……？」

「皇帝ダケよりも強力な毒素を持つキノコには、皇后ダケという名がつけられてるわ。皇帝ダケの根元に隠れるように、ひとつそりと生えていることからなの。でもね、この名前はぴったりだと思うわ。だって女は弱いと見せかけて、実は男よりも強靭さを秘めている存在だもの。 ねえノエル、あんたのお父上はあんなに健康でおられたのに、どうしてここ一年でこうも弱つたのか、不思議に思わなかつた？」

ぞわり、と背筋を悪寒が走り、ノエルはおのが身を両手で抱きしめた。ディアドラは何を言おうとしているのだ？ なぜだか、とても怖い。

無言のノエルに見下すような視線をやつつづ、ディアドラはつづけた。

「皇后ダケの毒素を精製して、毎日の食事や薬に少しずつ混ぜる。そうすると確実にゆっくり体が弱まって、証拠を残さず人に殺すことができる。半年前から、あなたの父親で試させてもらってるわ」はじめノエルは、その言葉が理解できなかつた。とこりより、理解を頭が拒んでいた。信じたくなかったのだ。

「ど、どうしてそんな悪ふざけを言うの……？　お願い、もうからかうのはやめて！」

狼狽するノエルを気にもとめず、ディアドラは腰の小物入れから小さなガラス瓶をとり出した。

「これが、その皇后ダケの毒素よ。無色無臭で、料理や薬湯に入れてもばれやしない。はじめは一年前、ここへ私が来てすぐに、アンガス王のお酒にませて飲ませたわ。それからもずつと、薬湯に混ぜて飲ませつづけてきた。そろそろ限界でしょうね、陛下の体力も」目の前でそのガラスの小瓶をこれ見よがしに振られ、ノエルはしごりだすような声音で尋ねた。

「……どうしてそんなことを……どうしてお父さまに毒を盛つたりしたの……？　ねえ、嘘よね、たちの悪い冗談でしょ？！　嘘だつて言つて！」

するとディアドラの表情が、突如消え去つた。銀の髪がもつれて、その白い頬にからみつく。人ならぬものに変貌したかのようだ。ノエルはその変貌ぶりに驚え、後ずさつた。

つづくディアドラの声は、奇妙なほどに静かだった。

「私はハイランドの女王になるの。そのためには、アンガス王もおまえも邪魔なだけ。とくにおまえはローランド王の歓心を買つたばかりか、その気色の悪い力で私の魔力を奪おうとしている。母親はなみの魔女じやなかつたし、おまえもいづれは目覚めるとは思つたわ。でもそれがこんなに強力だつたなんて……。とにかくノエル、おまえは邪魔なだけなのよ。消えてもらわなければ」

「わ、私はウイリアムさまの歓心を得たりしてないし、それにあなたの魔力を奪つたりしてないわ、ディ！　それにあなたが女王

になりたいなら、私は王位継承権を譲るつもりでいたわ　　あなたがお父さまに毒を盛つたりしなければ！」

するとディアドラは憎悪をみなぎらせた眼差しで、ノエルを見やつた。

「ノエル、相変わらず何も分かつちゃいないのね。ウイリアムさまは、さつき陛下におまえとの結婚を申し込んだのよ。中庭で私と踊ったすぐ後に、ね。陛下のもとにいた侍女は私の味方で、すぐさま知させてくれたのよ。それに魔力だつて　私はあの魔術槍試合以降、まともな魔術を使えなくなつてしまつた！　こんなことありえないわ！　一体、何をしたのよ？！　私だって魔女の血すじに生まれたのに、あんたよりわざかに親の地位が低いばかりに、あんたの下位に甘んじなければならなかつた！　……それでどれだけ屈辱を味わってきたことか。あんたには分からぬでしようね、ノエル。私はもう絶対に、誰にも見下されない地位に、のぼりつめてやるつむりよ！」

悪鬼めいた形相を浮かべたディアドラに、ノエルはぞつとした。何も信じたくなかつた。いとこの正体がこんなにも邪悪で、ノエルの父王に毒を盛つていただなんて。

そんなノエルを見て、やや冷静さをとり戻したらしいディアドラは、小瓶をちらつかせるようにして言つた。

「これをあと数滴を飲ませるだけで、陛下は死ぬわねーーまあでも、おまえがそこから飛び降りるなら、陛下の命は救つてやつてもいいわ。父親のために死ぬ勇気はない？　ノエル」

あまりな申し出に、さすがのノエルも逆上した。

「——嘘つき！　私がここで死んでも、あなたは必ずお父さまを殺すわ、ディ！　邪魔者を許すはずがないもの！」

「ふふ、少しばかり恵みがついたようじゃない？　まるきり馬鹿じゃないかつた、つてわけねえ」

ノエルはこれまで感じたことのないような、怒りの発作に襲われた。ディアドラにつめより、その手からガラスの小瓶を奪いとろう

とする。一人は無我夢中のもみ合いとなつた。

周囲の壁にぶつかりながら、互いに相手の髪やドレスをつかんで争う。だが長身のディアドラのほうが、しだいに優勢になつてきた。やがてノエルは、あの崩れた胸壁のほうへと押しつけられた。

「おまえを始末するのに、わざわざ加勢を呼んでおいたんだけど。

……その必要はなかつたみたいね」

暗闇からふらりと姿を現したディアウルが、ノエルのそばをかすめ飛ぶ。

「ディ、あなたは……っ！」

憤りと絶望にまみれながら、ノエルはディアドラをにらみ叫びかけたが。それ以上、言葉をつむぐことはかなわなかつた。

さらに強く胸壁に押しつけられたノエルは、背後の石積みがぐらりと揺れるのを感じた。きっと、ディアドラがあらかじめ崩れるよう細工していたに違いない。

「さよなら、ノエル」

次の瞬間、崩れた胸壁とともに、ノエルははるかなる海面へと墜落したのだった。

ノエルはおのれの悲鳴で目を覚ました。あたりは薄暗いが、どうやらここは、温かなベッドの中のようだ。心を落ちつかせるラベンダーの香りが、寝具から漂ってくる。

（ゆ、夢だったの……？ ディのこともお父さまのことかも。悪い夢……？）

ほつとして枕に頭をうずめる。

そう、ここは自分の部屋に違いない。もうすぐ夜が明けたら、いつものように侍女がやつてきて着替えをさせてくれて、そして朝食の席に着く。そこには客人のヴィリアムをもてなすディアドラが、いつものように優雅で美しい微笑みを浮かべていて――。

「どうしたい王女さま？ もしかして、どうか痛むのか？」

大きな音をたてて扉が開き、野太い男の声が響いた。とたん、部屋の中がぱっと明るくなる。壁に備えつけられた燭台が、ひとりでに点灯したのだ。

ノエルは声をあげるのも忘れて、珍入者を見やつた。緑の髪の、たくましい大男……ヤドリギ妖精のジェイミーだった。

（どういうこと？――どうしてジェイミーがここに？）

うろたえながら辺りを見まわして初めて、そこが自室ではないと気がついた。

エキゾチックなアラベスク模様のテーブル。その上にはクリスタルのランプ。やわらかそうな藤色のクッションの置かれた長椅子。床はイグサではなく、ふかふかした異国渡りの絨毯がしきつめられている。

（もしかしてここは、妖精の宮殿……？）

ノエルはベッドを出て、ぽかんと室内を見まわし、最後に視線をジェイミーにそそいだ。

「なあ王女さま。あんたがあの悪女に海へ突き落とされたのを、イ

一レンが助けたんだよ。覚えてないかい？」

ジヒイミーは言いづらそうに告げてきた。

「やつぱりあれは夢じゃなかつたのね……」

「ディアドラの罠にはめられて、殺されかけたこと。そして父王が毒殺されかかつていること。

「——私、こんなところにこられないと、お父さまがディに毒殺されてしまうわ！ 王宮へ戻らないと……」

ノエルはあわてて、ジヒイミーにつめよつた。

「まあ、やつと田覗めたのね、レディ・ノエル……！ とつても心配したわ！」

いきなりノックもなしに扉が開き、妖精女王が入ってきた。女王は前回会つた時とは違ひ、寝衣の上にローブという、くつろいだ姿である。そこで初めて自分も寝衣姿だったと気づき、ノエルはあわててベッドシーツをはいでまとつた。

そして女王の前でなんとか淑女らしく膝を折り、懇願の言葉をのべた。

「陛下、こんな姿で申し訳ございません。でも、でも今すぐに、私を王宮へと帰していただきたいのです！ 早く助けに行かなれば、私の父が……っ！」

「——残念だが、アンガス王は崩御されたと、少し前に触れが出ている。病が悪化したことだが……」

女王につづいて入室してきた見知らぬ男が、そう告げた。異国風の面だちをした、若い男だ。イーレンによく似た衣装をまとっている。だが彼が何者かより、その口にした言葉のほうが今のノエルには重要だった。

「お父さまが……亡くなられた？ まさか」

鈍器で頭を強打されたかのような衝撃を受けた。

誰かにそれを嘘だとつてほしくて、周囲を見まわす。だが否定する者はいない。

「お気の毒だけれど、本当のことよ、レディ・ノエル。城内では、

あなたは誤つて海へ落ちて亡くなつたことになつてゐる。お父上はそのことで衝撃を受けられて、すぐにお亡くなりになつたそうなの。私の配下の者が、ひそかに王の「」遺骸を確認したんだけど、たしかに息をひきとつておられたそうよ。

女王の言葉のひとつひとつが、心を突き刺すように響く。  
お父さまが亡くなつた。

私が死んだと誤解して……きっと強いショックを受けて。もともと毒で弱つていた体が、心の痛みで崩壊したのだ。

ノエルは力なく床に座りこんだ。皆が助け起こそうとしてくれたが、近寄らないよう、手でふりはらい。

「お願い、一人にして。私を一人に。……一人で考えさせて！」

いつになく激しい口調で告げると、皆は素直に部屋を去つていく。一人残された室内で、ノエルはよろよろと立ち上がり、ベッドの支柱にもたれかかった。どうしても力が出ない。考える力も、泣く力も。どうしてよいか分からぬ。

ベッドに呆然と座り込みながら、ノエルはいつまでも、うつろなまなざしで空中をにらんでいた。

勝ち誇つたティアドロの笑い声が、どこからか聞こえた気がした。

「おい、まさかこのままにはしておかないんだろ、イーレン？ アンガス王の遺骸ぐらいは、とり戻してやるんだよな？！」

手近なテーブルをどんと叩きながら、ジョイミーが怒鳴りつけてきた。

広々とした厨房では、料理係の妖精らがあのおの作業をしていたが、その手が一斉に止まる。皆の呆れたような視線をものともせず、ジョイミーはさらに翼任にくつてかかつてきた。

「あんた、料理なんかしてる場合じゃねえだろうがっ！　ええ？　大体あの王女さまを、これからどうするつもりなんだよっ！　このままじやあの性悪女がハイランド女王になっちゃうぜ？」

「26番の薬草を一つまみ、とつてくれ」

翼任はあつさりジョイミーを無視し、かたわらの従者にそう命じた。

従者——醜い姿の悪鬼ダウルが、きれいに分類された薬草箱の中から、乾燥した草をとりだし翼任に手渡す。翼任はその薬草を乳鉢に入れ、他の粉末ともども摺りはじめた。

角ととがった耳、裂けた口元、白目の部分のない紫の大きな目。ダウルの姿はあまりにも異質だったが、他の使用者とおそろいの帽子に制服をまとう様子は、どことなく滑稽だった。

「イーレン、無視すんなよっ！　だいたい、なんでこんなのを従者にしたりするんだよ？！　この妖精国だって人材はいるつてのに…！　敵方のしもべだった悪鬼ダウルを従者にしたことが、ジョイミーはどうにも気に入らないようだ。

「ダウルはもともと、荒れ地に住まう穩やかな種族だ。それをヴァイキングどもが邪な術で操っているだけで。それにダウルは、この地に住まうどの人間や妖精よりも、薬草に詳しい。おかげで私の薬湯のバリエーションも増えた」

淡々と翼任は語った。ジエイミーは悔りのまゝで、ダウルを見るやる。

「ふん、弱つちいから、ヴァイキングに利用されたりするんだろうが。俺はこんなやつ認めないね。従者にするなら、妖精のがよっぽど優秀だろ?」「元気だ。

悪態をつくジエイミーに、翼任はさらりと告げた。

「もう嫌うな。ここは今後、おまえともどもレディ・ノエルの騎士になる予定なんだから」

「……は?」

あんぐりと大口をあけたジエイミーの間抜けな表情は、なかなかの見物だった。

翼任はもう一度、はつきりと言つてやつた。

「女王とも話し合つたんだが、レディ・ノエルには騎士団が必要だ。何しろこれから、あの悪女と戦つて国を取り戻すんだからな。……新生のノエル騎士団の団長はおまえだよ、ヤドリギ妖精のジエイミー。そしてそのダウルは、おまえ付きの騎士見習いだ」

あつけにとられて声もせず、口を魚のようにぱくぱくさせたジエイミーを横目に、翼任は薬草を摺り終えた。かたわらの炉にかかる鉄鍋に、その薬草の粉末を入れてかきませる。

「おい、イーレン……それって冗談だよな? なんでこの俺が、人間の騎士になんか……俺はこの妖精国の女王を守るために、戦士なんだぜ?」

「女王も了承済みだ。もうすべてでは決まってるんだよ、ジエイミー」「薬湯をかきませながら、翼任は伝えたが。

ジエイミーはどうにも、納得がいかないらしい。

「なんだジエイミー、あれほどレディ・ノエルに同情してたのに、彼女を守るのが嫌なのか?」

「そうじゃなくてよお……なんていうか、人間を妖精が守るってのが違うっていうか。それにこのダウルも一緒に、かつこがつかねえ

薬湯をマグに注ぎ、翼任はジョイニーに告げた。

「この薬湯をレディ・ノエルのもとへ持っていくから、ついでに騎

士団のことをお伝えしよう。おまえたちもついてくるよう」

「なあイーレン、冗談だろお？ なんでこの俺が

「泣き言を言つた。レディ・ノエルの体調が良いやうなら、すぐこ  
も騎士任命の儀式をとり行つ。覚悟を決めるんだな」

熊のよつに不満げなうなり声をあげるジョイニーと、ビヒカはに  
かんだ様子のダウルを従えて、翼任は調理場を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1402s/>

---

陰陽の魔女

2011年9月10日03時22分発行